

源氏物語

宿り木

紫式部

青空文庫

あふけなく大御おほみむすめをいにしへの人

に似よとも思ひけるかな
(晶子)

そのころ後こうきゆう宮みやで藤壺ふじつぼと言われているのは亡き左大臣むすめの女御によごしであつた。帝みかどがまだ東宮とうきゆうでいらせられた時に、最も初めに上あがった人であつたから、親しみをお持ちになることは殊に深くて、御愛情はお持ちになるのであつたが、そのの形になつて現われるようなこともなくて歳としつき月つきがたつうちに、中ちゆうぐう宮みやのほうには宮たちも多くおできになつて、それぞれごりつぱにおなりあそばされたにもかかわらず、この女御は内親王をお一人お生みする

ことができたただけであつた。自分が後宮の競争に失敗する悲しい運命を見たかわりに、この宮を長い将来にかけて唯一の慰安にするまでも完全な幸福のある方にしたいと女御は大事にかしずいていた。御容貌ようぼうもお美しかったから帝も愛しておいでになり、中宮からお生まれになつた女にょいち一の宮を、世にたぐいもないほど帝が尊重しておいでになることによつて、世間がまた格別な敬意を寄せるという、こうした点は別として、皇女としてはなやかな生活をしておいでになることではあまり劣ることもなくて、女御の父大臣の勢力の大きかつた名残なごりはまだ家に残り、物質的に不自由のないところから、女二の宮の侍女たちの服装をはじめとし、御殿内を季節季節にしたがつて変える装飾もはなやかにして、派手はでで

でそして重厚な貴女らしさを失わぬ用意のあるおかしげきをして
いた。宮の十四におなりになる年に裳着もぎの式を行なおうとして、
その春から専心に仕度したくをして、何事も並み並みに平凡にならぬよ
うにしたいと女御は願っていた。自家の祖先から伝わった宝物類
も晴れの式に役だてようと捜し出させて、非常に熱心になってい
た女御が、夏ごろから物怪もののけに煩わずらい始めてまもなく死んだ。残念
に思おぼしめ召みかどされて帝もお歎きになった。優しい人であったため、殿
上役人なども御所の内が寂しくなったように言つて惜しんだ。直
接の關係のなかつた女官たちなども藤壺ふじつぼの女御を皆しのんだ。
女二の宮はまして若い少女心おとめこころにお心細くも悲しくも思い沈んで
おいでになろうことを、哀れに気がかりに思召す帝は、四十九日

が過ぎるとまもなくそつと御所へお呼び寄せになった。その藤壺へおいでになつて帝は女二の宮を慰めておいでになるのであつた。黒い喪服姿になつておいでになる宮は、いつそう可憐かれんに見え、品よさがすぐれておいでになつた。性質も聡明そうめいで、母の女御よりも静かで深みのあることは少しまさっているのをお知りになつて、御安心はあそばされるのであつたが、実際問題としてはこの方に確かな後援者と見るべき伯父おじはなく、わずかに女御と腹違いの兄弟おおくらぎようが、大蔵卿、修理大夫だゆうなどであるだけであつたから、格別世間から重んぜられてもいず地位の高くもない人を背景にしていることは女の身にとつて不利な場合が多いであらうことが哀れである、帝はただ一人の親となつてこの宮のことに全責任のある気

のあそばすのもお苦しかった。

お庭の菊の花がまだ終わりがたにもならず盛りなころ、空模様も時雨しぐれになって寂しい日であつたが、帝はどこよりもまず藤壺へおいでになり、故人の女御のことなどをお話し出しになると、宮はおおようではあるが子供らしくはなく、難のないお答えなどされるのを帝はかわいく思召した。こうした人の価値を認めて愛する良人おとこの**ないはずはない**、朱雀院すざくが姫宮を六条院へお嫁とつがせになつた時のことを思つてごらんになると、あの当時は飽き足らぬことである、皇女は一人でおいでになるほうが神聖でいいとも世間で言つたものであるが、源中納言のようになすぐれた子をお持ちになり、それがついているために昔と変わらぬ世の尊敬も女三の宮

が受けておいでになる事実もあるではないか、そうでなく独身でおいでになれば、弱い女性の身には、自発的のことでなく過失に墮ちてしまうことがあつて、自然人から輕侮を受ける結果になつていたかもしれぬと、こんなことを帝はお思い続けになつて、ともかくも自分の位にいるうちに婿をきめておきたい、だれが好配偶者とするに足る人物であろうとお思いになると、その女三の宮の御子の源中納言以外に適当な婿はないということへ帝のお考えは歸着した。内親王の良人^{おっと}としてどの点でも似合わしくないところはない、愛人を他に持つていたとしても、妻になつた宮を辱^{はずか}しめるようなことはしないはずの男である、しかしながら早くしないでは正妻というものをいつまでも持たずにいるわけではないので

あるから、その前に自分の意向をかれにほのめかしておきたいとこんなことを帝は時々思召した。

ある日帝は碁を打っておいでになった。暮れがたになり時雨しぐれの走るのも趣があつて、菊へ夕明りのさした色も美しいのを御覧になつて、蔵くらうど人を召して、

「今殿上の室にはだれとだれがいるか」

と、お尋ねになつた。

なかつかさきようしんのう
「中務卿親王、上野の親王、中納言源の朝臣あそんがおられます」

「中納言の朝臣をこちらへ」

と、仰せがあつて薫かおるがまいった。實際源中納言はこうした特別

な御愛あいちよう寵ちゆうによつて召される人らしく、遠くからもおう芳香
をはじめとして、高い価値のある風采ふうさいを持つていた。

「今日の時雨しぐれは平生よりも明るくて、感じのよい日に思われるの
だが、音楽は聞こうという気はしないし、つまらぬことにせよつ
れづれを慰めるのにはまずこれがいいと思うから」

と帝はお言いになつて、碁盤をそばへお取り寄せになり、薰へ
相手をお命じになつた。いつもこんなふうに親しくおそばへお呼
びになる習慣から、格別何でもなく薰が思つていると、

「よい賭物かけものがあつていいはずなんだがね、少しの負けぐらいで
それは渡せない。何だと思う、それを」

という仰せがあつた。お心持ちを悟つたのか薰は平生よりも緊

張したふうになっていた。碁の勝負で三番のうち二番を帝はお負けになった。

「くやしいことだ。まあ今日はこの庭の菊一枝を許す」

このお言葉にお答えはせずに薫は階きざはしをおりて、美しい菊の一枝を折って来た。そして、

世の常の垣根かきねにはほふ花ならば心のままに折りて見ましを

この歌を奏したのは思召しに添ったことであつた。

霜にあへず枯れにし園の菊なれど残りの色はあせずもあるか

な

と帝は仰せられた。こんなふうにおりおりおほのめかしになるのを、直接薫は伺いながらも、この人の性質であるから、すぐに進んで出ようとも思わなかつた。結婚をするのは自分の本意でない、今までもいろいろな縁談があつて、その人々に対して気の毒な感情もありながら、断わり続けてきたのに、今になつて妻を持つては、俗人と違うことを標ひょうぼう 榜ぼう していたものが、俗の世間へ歸つた気が自分でもして妙なものであらう。恋しくてならぬ人でもあればともかくもであるがと否定のされる心でまた、これが

后きささきばら 腹の姫君であれば、そうも思わないであらうがと考える中

納言はおそれおおくもあまりに思い上がったものである。

この話を左大臣は聞いて、六の君との縁組みに ひょうぶきょう兵部卿の宮

の進まぬふうは見せられても、薫は一度はああして断わってみせたものの、ねんごろに頼めばしづしづにもせよ結婚をしてくれるはずであると樂觀していたのに、意外なことが起こってきそうであると思ひ、兵部卿の宮は正面からの話にはお乗りにはならないでいて、何かと六の君に交渉を求めて手紙をよくおよこしになるのであるから、それは真実性の少ないものであつても、妻にされれば御愛情の生じないはずもない、どんなに忠実な良人おつとになる人があつても地位の低い男にやるのは世間体も悪く、自身の心も満足のできないことであろうからと思つて、やはり兵部卿の宮を目

標として進むことに定めた。女の子によい婿のあることの困難な世の中になり、帝みかどすらも御娘のために婿選びの労をおとりになるのであるから、普通の家の娘が婚期をさえ過ぎさせてしまつてはならぬなどと、帝のお考えに多少の非難めいたことも左大臣は言い、中宮へ兵部卿の宮との縁組みの実現されるように訴えることがたびたびになったため、後の宮はお困りになり、宮へ、

「気の毒なように長くそれを望んで大臣は待ち暮らしていたのだのに、口実を作つていつまでもお応じにならないのも無情なことですよ。親王というものは後援者次第で光りもし、光らなくも見えるものなのですよ。お上かみの御代みよももう末になつていくと始終仰せになるのだからね。あなたはよく考えなければならぬ。普通

の人の場合は定きまつた夫人を持つていてさらに結婚することは困難なですよ。それでもあの大臣がまじめ一方でいながら二人の夫人を持ち、双方を同じように愛していくことができているという実例もあるではありませんか。ましてあなたはお上の思召しどおりの地位ができれば、幾人でも侍していいわけなのだから」

と、平生にまして長々御教訓をあそばすのを承つて、兵部卿の宮御自身も無関心では決しておいでにならない女性のことであつたから、それをしいてお拒こぼみになる理由もないのである。ただ権けん家んかに媚君としてたいそうな扱いを受けることは、自由を失うことであろうと、その点がいやなように思われになるのであるが、母宮のお言葉どおりにこの大臣の反感を多く買つておくことは得

策でない、今になつては抵抗力も少なくおなりになつた。多情な御性質であるから、あの按察使あぜち大納言の家の紅梅の姫君をもまだ断念してはおいでにならず、なお花紅葉もみじにつけ好奇心の対象としてそこへも御消息はよこしておいでになるのである。

その年は事なしに終わつた。女二の宮の喪期も終わつたのであるから、帝はもうおはばかりあそばすことはなくなつた。

「御懇望にさえなればすぐにお許しになりたい思召しとうかがわれます」

こんなふうには薫へ告げに来る人々もあるためあまりに知らず顔に冷淡なものも無礼なことであると、しいて心を引き立てて、女二の宮付きの人を通して、求婚者としての手紙をおりおり送ること

もするようになったが、取り合わぬ態度などはもとよりお示しになるはずもない。帝は何月ごろと結婚の期を思召すというようなことも人から聞き、自身でも御許容あそばすことはうかがわれるのであったが、心の中では今も死んだ宇治の人ばかりが恋しく思われて、この悲しみを忘れ尽くせる日があるうとは思われぬために、こうまで心のつながれる因縁のあつたあの人と、ついに夫婦とはならず終わつたのはどうしたことなのであるうとそれを怪しがっていた。身分がどれほど低くとも、あの人に少しでも似たところのある人であれば自分は妻として愛するであろう、はんごん反魂香こうの煙が描いたという影像だけでも見る方法はないかとこんなことばかりが薫には思われて、女二にょにの宮みやとの結婚の成立を待つ心

もないのである。

左大臣のほうでは六の君の結婚の用意にかかつて、八月ごろにと宮へその期を申し上げた。これを二条の院の中の君も聞いた。

やはりそうであつた、自分などという何のよい背景も持たない女には必ず幸福の破綻はたんがあるであらうと思いつつ、今日まで来たのである。多情な御性質とはかねて聞いていて、頼みにならぬ方とは思いつつも、いっしょにいては恨めしく思うようなことも宮はしてお見せにならず、深い愛の変わる世もないような約束ばかりをあそばした。それがにわかおつとに権家の娘の良人になつておしまいになつたなら、どうして静めえられる自分の心であらう、並み並みの身分の男のように、まったく自分から離れておしまいにな

ることはあるまいが、どんなに悩ましい思いを多くせねばならぬことであろう、自分はどうしても薄命な生まれなのであるから、しまいにはまた宇治の山里へ帰ることになるのであるかと考えられるにつけても、出て来たままになるよりも再び帰ることは宇治の里人にも譏^{そし}らわしいことであるに違いない、返す返すも父宮の御遺言にそむいて結婚をし、山莊を出て来た自分の誤りが恥ずかしい、しかさせた運命が恨めしいと中の君は思うのであった。姉君はおおようで、柔らかいふうなところばかりが外に見えたが、精神は確^{しか}としておいでになった。中納言が今も忘れがたいように姉君の死を悲しみ続けているが、もし生きていたらば、今の自分のような物思いをすることがあったかもしれぬ、そうした未来を

よく察して、あの人の妻になろうとされなかつた、いろいろに身
をかわすようにして中納言の恋からのがれ続けていて、しまいに
は尼になろうとしたではないか、命が助かつても必ず仏弟子にな
つていたに違いない、今思つてみればきわめて深い思慮のある方
であつた、父宮も姉君も自分をこの上もない、軽率な女であると
あの世から見ておいでになるであろうと、恥ずかしく悲しく思う
のであつたが、何も言うまい、言つても効かのないことを言つて嫉し
妬つとがましい心を見られる必要もないと中の君は思い返して、宮の
新しい御縁組みのことは耳にはいつてこぬふうで過ごしていた。

宮はこの話のきまつてからは、平生よりもまた多く愛情をお示
しになり、なつかしいふうに将来のことをどの日もどの日もお話

しになり、この世だけでない永久の夫婦の愛をお約しになるのであった。中の君はこの五月ごろから普通でない身体からだの悩ましさを覚えていた。非常に苦しがるようなことはないが、食欲が減退して、毎日横にばかりなっていた。妊婦というものを近く見る御経験のなかつた宮は、ただ暑いころであるからこんなふうになつていたのであろうと思召したが、さすがに不審に思召すこともあつて、

「ひよつとすればあなたに子ができるようになつたのではないだろうか。妊婦というものはそんなふう^らに苦しがるものだそうだから」

ともお言いになつたが、中の君は恥ずかしくて、そうでないふ

うばかりを作っているのを、進み出て申し上げる人もないため、
確かには宮もおわかりにならなかつた。

八月になると、左大臣の姫君の所へ宮がはじめておいでになるのは幾日ということが外から中の君へ聞こえてきた。宮は隔て心をお持ちになるのではないが、お言いだしになることは氣の毒でかわいそうに思われておできにならないのを、夫人はそれをさええ恨めしく思っていた。隠れて行なわれることでなく、世間じゅうで知っていることをいつごろとだけでもお言いにならぬのであるから、中の君の恨めしくなるのは道理である。この夫人が二条の院へ来てからは、特別な御用事などがなくかぎりは御所へお行きになつても、ほかへおまわりになり、泊まつてお帰りになるような

ことを宮はあそばさないものであつて、情人の所をお訪ねたずになつて孤閨こけいを夫人にお守らせになることもなかつたのが、にわかにわかに一方で結婚生活をするようになればどんな気がするであらうと、お心苦しくお思われになるため、今から習慣を少しつけさせようとされて、時々御所で宿直とのいなどをあそばされたりするのを、夫人にはそれも皆恨めしいほうにばかり解釈されたに違ちがひない。中納言もかわいそうなことであつて、この問題における中の君を思つて、宮は浮気うわきな御性質なのであるから、愛してはおいでになつても、はなやかな新しい夫人のほうへお心が多く引かれることになつて、婚家もまた勢いをたのんでゐる所であるから、間断なしに婿君をお引き留めしようとするこゝになれば、今までとは

違つた変わり方に中の君は待ち続ける夜を重ねることになつては
哀れであるなどと、こんなことが思われるにつけても、なんたる
ことであろう、不都合なのは自分である、何のためにあの人を宮
へお譲りしたのであらう、死んだ姫君に恋を覚えてからは、宗教
的に澄み切つた心も不透明なものになり、盲目的になり、あらゆる
情熱を集めてあの人を思いながらも、同意を得ずに男性の力で
勝つことは本意でないとはばかつて、ただ少しでもあの人に愛さ
れて相思う恋の成立をば夢見て未来の楽しい空想ばかりを自分は
していたのに、あの方は恋を感じぬふうを見せ続け、さすがに冷
淡には自分を見ていない証あかしとして、同じ身だと思えと言つて中の
君との結婚を勧めたのであつたが、自分にとってはただあの人

態度がくやくしく恨めしかつたところから、あの人の計画をこわして宮と中の君との結婚を行なわせてしまえばなどと、無理な道をとって狂気じみた媒介者になつた時のことを思い出すと、不都合なのは自分であつたと返す返す薫は悔やまれた。宮もどんな御事情になつていても、あの時のことをお思い出しになれば自分に対してでも少し御遠慮があつていいはずであると思うのであつたが、また宮はそんな方ではない、あれ以来あの時のことを話題にされるようなことはないではないか、多情な人というものは、異性だけでなく、友情においても誠意の少ないものらしいなどとお憎みする心さえ薫に起こつた。自身があまりに純一な心から他人をもどかしく思うのであるらしい。あの人を死なせてからの自分の

心は帝の御娘を賜わるといふことになつたのもうれしいこととは思われない、中の君を妻に得られていたならと思ふ心が月日にそえ勝つてくるのも、ただあの人の妹であるといふことが原因もとになつていてその思いが捨てられないのである、姉きょうだい妹まいといううちにもあの二人の女性の持ち合つていた愛は限度もないものであつて、臨終に近づいたころにも、残しておく妹を自分と同じものと思へと言ひ、ほかに心残りはないが、自分がこうなれと願つたあの縁組みをはずされたこと、他へ譲られたことで安心ができず、その成り行きを見るためにだけ生きていたい気がするとあの人が言つたのであつたから、あの世で宮の新しい御結婚のことなどを知つては、いつそう自分を恨めしく思ふことであらうなどと、切

実に寂しいひと独り寝をする夜ごとにかおる薫は、風の音にも目のさめてこんなことが思われ、過去と未来を思い、この世を味気なくばかり思った。かりそめの情で愛人とし、女房として家に置いてある人たちの中には、自然と真実の愛も生じてきそうな人もあるはずであるが、事実としてはそんな人もない。いつも独身者の心持ちよりほかを知らなかった。そうした女房勤めしている中には、宇治の姫君たちにも劣らぬ階級の人も、時世の移りで不幸な身の上になり、心細く暮らしていたりしたのを、同情して家へ呼んだというような種類の女房が少なくはないのであるが、異性との交渉はそれほどにとどめて、出家の目的の達せられる時に、取り立ててこの人が心にかかると思われるような愛着の覚えられる人は作ら

ないでおこうと深く思っていた自分であったにもかかわらず、今では死んだ恋人のゆかりの中の君に多く心の惹かれて^ひいる自分が認められる、人並みな恋でない恋に苦しむとは自分のことながらも残念であるなどという思いにとらわれていて、そのまま眠りえずに明かしてしまった暁、立つ霧を隔てて草花の姿のいろいろと美しく見える中にはかない朝顔の混じっているのが特に目にとまる気がした。人生の頼みなさにたとえられた花であるから身に沁^しんで薫は見られたのであろう。宵^{よい}のまま揚げ戸も上げたままにして縁の近い所でうたた寝のようにして横たわり朝になったのであったから、この花の咲いていくところもただ一人薫がながめていたのであった。侍を呼んで、

「北の院へ伺おうと思うから、簡単な車を出させるように」と命じてから装束を改めた。

出かけるために庭へおりて、秋の花の中に混じって立った薫は、わざわざ艶えんなふうを見せようとするのではないが、不思議なまで艶で、高貴な品が備わり、氣どった風流男などとは比べられぬ美しさがあつた。朝顔を手もとへ引き寄せるとはなはだしく露がこぼれた。

「今朝けさのまの色にや愛めでん置く露の消えぬにかかる花と見る見る

はかない」

などとひとりごと独言をしながら薫は折つて手にした。女おみなえし郎花には

触れないで。

明け放れるのにしたがって霧の濃くなつた空の艶な気のする下を二条の院へ向かつた薫は、宮のお留守るすの日はだれもゆるりと寝ていることであろう、格子や妻戸をたたいて案内を乞こうのも物馴なれぬ男に思われるであろう、あまり早朝に来すぎたと思ひながら薫は従者を呼んで、中門のあいた口から中をのぞかせてみると、「お格子が皆上がつているようでございます。そして女房たちの何かいたしますけはい気配がいたします」

と言う。下車して霧の中を美しく薫の歩いてはいつて来るのを

女房たちは知り、宮がお微しのび場所からお帰りになったのかと思つていたが、露に湿つた空気が薫の持つ特殊のにおいを運んできたためにだれであるかを悟り、

「やはり特別な方ですね。ただあまりに澄んだふうでいらつしやるのが物足りないだけね」

とも若い女房はささやいていた。

驚いたふうも現わさず、感じのよいほどにその人たちが衣きぬ擦れすの音を立てて褥しとねを出したりする様子も品よく思われた。

「ここにすわつてもよいとお許しくださいます点は名誉に思われますが、しかしこうした御簾みすの前の遠々しいおもてなしを受けることで悲観されて、たびたびは何えないのです」

と薫が言うと、

「それではどういたせばお気が済むのでございますか」

女房はこう答えた。

「北側のお座敷というような、隠れた室が私などという古なじみのゆるりとさせていただくによい所です。しかしそれも奥様の思召しによることですから、不平は申し上げません」

と言い、薫は縁側から一段高い長押なげしに上半身を寄せかけるようにして坐ざしているのを見て、例の女房たちが、

「ほんの少しあちらへおいであそばせ」

などと言ひ、夫人を促していた。

もとから様子のおとなしい、男の荒さなどは持たぬ薫であるが、

いよいよしんみり静かなふうになっていたから、中の君はこの人と対談することの恥ずかしく思われたことも、時がもはや薄らがせてなしやすく思うようになっていた。

「お身体からだが悪いと伺っていますのはどんなふうの御病気ですか」
などと薫は聞くが、夫人からはかばかしい返辞を得ることはできない。平生よりもめいつたふうの見えるのに理由のあることを知っている薫は、それを哀れに見て、こまやかに世の中に処していく心の覚悟というようなものを、兄弟などがあつて、教えもし慰めもするふうに言うのであつた。声なども特によく似たものともその当時は思わなかつたのであるが、怪しいほど薫には昔の人のとおりに聞こえる中の君の声であつた。人目に見苦しくなければ

ば、御簾みすも引き上げて差し向かいになつて話したい、病氣をして
いるという顔が見たい心のいっぱいになるのにも、人間は生きて
いる間次から次へ物思いの続くものであるということはこれであ
る、自分はまたこうした心の悶もだえをしていかねばならぬ身になつ
たと薫はみずから悟つた。

「はなやかなこの世の存在ではなくとも、心に物思いをして歎き
にわが身をもてあますような人にはならず、一生を過すごしたい
と願つていた私ですが、自身の心から悲しみも見ることになり、
愚かしい後悔もこもごも覚えることになりましたのは残念です。
官位の昇進が思うようにならぬということ人を最も大きな歎き
としていますが、それよりも私のする歎きのほうが少し罪の深さ

はまさるだろうと思われませす」

などと言いながら、薫は持つて来た花を扇に載せて見ていたが、そのうちに白い朝顔は赤みを帯びてきて、それがまた美しい色に見られるために、御簾の中へ静かにそれを差し入れて、

よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花

と言った。わざとらしくてこの人が携えて来たのでもないのに、よく露も落とさずにもたらされたものであると思つて、中の君がながめ入っているうちに見る見る萎しぼんでいく。

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまさ
れる

『何にかかれる』（露のいのちぞ）

と低い声で言い、それに続けては何も言わず、遠慮深く口をつぐんでしまう中の君のこんなところも故人によく似ていると思うと、薫はまずそれが悲しかった。

「秋はまたいつそう私を憂鬱ゆううつにします。慰むかと思ひまして先

日も宇治へ行つて来たのです。庭も籬まがきも實際荒れていましたから、

（里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋ののらなる）堪えがたい気持ちを覚えました。私の父の院かくがお亡れになったあとで、

晩年出家をされ籠こもつておいでになつた嵯峨さかの院もまた六条院ものぞいて見る者は皆おさえきれず泣かされたものです。木や草の色からも、水の流れからも悲しみは誘われて、皆涙にくれて帰るのが常でした。院の御身边におられたのは平凡な素質の人もなく皆りっぱな方がたでしたがそれぞれ別な所へ別れて行き、世の中とは隔離した生活を志されたものです、またそうたいした身の上でない女房らは悲しみにおぼれきつて、もうどうなつてもいいというように山の中へはいったり、つまらぬ田舎いなかの人になつたりちりぢりに皆なつてしまいました。そうして故人の家を事実上荒らし果てたあとで、左大臣がまた来て住まれるようになり、宮がたもそれぞれ別れて六条院をお使いになることになつて、ただ今では

また昔の六条院が再現された形になりました。あれほど大きな悲しみに逢^あつたあとでも年月が経^ふればあきらめというものが出てくるものなのであろう、悲しみにも時が限りを示すものであると私はその時見ました。こう私は言っています。昔の悲しみは少年時代のことでしたから、悲痛としていても悲痛がそれほど身にしまなかつたのかもしれない。近く見ました悲しみの夢は、まだそれからさめることもどうすることもできません。どちらも死別によつての感傷には違いありませんが、親の死よりも罪深い恋人関係の人の死のほうに苦痛を多く覚えていますのさえみずから情けないことだと思つています」

こう言つて泣く薫に、にじみ出すほどの情の深さが見えた。大

姫君を知らず、愛していなかった人でも、この薫の悲しみにくれた様子を見ては涙のわかないはずもないと思われるのに、まして中の君自身もこのごろの苦い物思いに心細くなっていて、今まで以上に姉君のことが恋しく思い出されているのであったから、薫の憂いを見てはいっそうその思いがつのつて、ものを言われなほほどになり、泣くのをおさえきれずになっているのを薫はまた知って、双方で哀れに思い合った。

「世の憂きよりは（山里はものの寂しきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり）と昔の人の言いましたようにも私はまだ比べて考えることもなくて京に来て住んでおりましたが、このごろになりましてやはり山里へは行って静かな生活をしたというこ

とがしきりに思われるのでございます。でも思ってもすぐに実行のできませんことで弁の尼をうらやましくばかり思っております。今月の二十幾日はあすこの山の御寺みでらの鐘を聞いて黙もく禱とうをしたい気がしてならないのですが、あなたの御好意でそつと山荘へ私の行けるようにしていただけませんでしょうかと、この御相談を申し上げたく私は思っております」

と中の君は言った。

「宇治をどんなに恋しくお思いになりましたもそれは無理でしょう。あの道を辛しんぼう抱ほうして簡単に御婦人が行けるものですか。男でさえ往来するのが恐ろしい道ですからね、私なども思いながらあちらへまいることが延び延びになりがちなのです。宮様の御忌日

のことはあの阿闍梨あじやりに万事皆頼んできました。山莊のほうは私の希望を申せば仏様だけのものにしていただきたいのですよ。時々行つては痛い悲しみに襲われる所ですから、罪障消滅のできますような寺にしたいと私は思うのですが、あなたはどうかお考えになりますか。あなたの御意見によつてどうとも決めたいと思うのですから、ああしたいとか、そうしてもいいとか腹藏なくおっしゃってください。何事にもあなたのお心持ちをそのまま行なわせていただければそれで私は満足なのです」

と言ひ、まじめな話を薫かおるはした。経卷や仏像の供養などもこの人はまた宇治で行なおうとしているらしい。中の君が父宮の御忌日に託して宇治へ行き、そのまま引きこもろうとするのに賛同を

求めるふうであるのを知って、

「宇治へ引きこもろうというようなお考えをお出しになつてはいけませんよ。どんなことがあつても寛大な心になつて見ていらつしやい」

などとも忠告した。

日が高く上つてきて伺候者が集まつて来た様子であつたから、あまり長居をするのも秘密なことのありそうに誤解を受けることであろうから帰ろうと薰はして、

「どこへまいつても御簾みすの外へお置かれするような経験を持たないものですから恥ずかしくなります。またそのうち伺いませう」
こう挨拶あいさつをして行つたが、宮は御自身の留守の時を選んでな

ぜ来たのであろうとお疑いをお持ちになるような方であるからと
 薫は思い、それを避けるためにさぶらいどころ侍所うきよの長になっている右
 京大夫うだゆうを呼んで、

「昨夜宮様が御所からお出になつたと聞いて伺つたのですが、ま
 だ御帰邸になつておられないので失望をしました。御所へまいつ
 てお目にかかったらいいでしょうか」

と言つた。

「今日はお帰りでございました」

「ではまた夕方にでも」

薫はそして二条の院を出た。中の君の物越しの気配けはいに触れるごと
 くに、なぜ大姫君の望んだことに自分はそむいて、思慮の足らぬ

処置をとつたのであろうと後悔ばかりの続いて起こるのを、なぜ自分はこうまで一徹な心であらうと薫は反省もされた。この人はまだ精進を続けて仏勤めばかりを家ではしているのである。母宮はまだ若々しくたよりない御性質ではあるが、薫のこうした生活を危険なことと御覧になって、

「私はもういつまでも生きてはいないのでしようから、私のいる間は幸福なふうでいてください。あなたが仏道へはいろいろとしても、私自身尼になっていながらとめることはできないのだけれど、この世に生きている間の私はそれを寂しくも悲しくも思うことだろうから、結局罪を作ることになるだろうからね」

とお言いになるのが、薫にはもつたいなくもお気の毒にも思わ

れて、母宮のおいになる所では物思いのないふうを装っていた。

左大臣家では東の御殿をみがくようにもして設備しつらい媚君を迎えるのに遺憾なくとのえて 兵部卿ひょうぶきょうの宮をお待ちしているのであつたが、十六夜いざよいの月がだいぶ高くなるまでおいでにならぬため、非常にお気が進まないらしいのであるから将来もどうなることかと不安を覚えながらも使いを出してみると、夕方に御所をお出になつて二条の院においになるといふしらせがもたらされた。愛する人を持つておいでになるのであるからと不快に大臣は思ったが、今夜に済まさねば世間体も悪いと思ひ、息子むすこの頭中將とうちゅうを使いとして次の歌をお贈りするのであつた。

大空の月だに宿るわが宿に待つ宵よひ過ぎて見えぬ君かな

宮はこの日に新婚する自分を目前に見せたくない、あまりにそれは残酷であると思おぼしめ召して御所においでになったのであるが、手紙を中の君へおやりになった、その返事がどんなものであつたのか、宮が深くお動かされになつて、そつとまた二条の院へおはいりになつたのである。

可憐かれんな夫人を見て出かけるお氣持ちにはならず、氣の毒に思召す心からいろいろに将来の長い誓いをさせるのであるが、中の君の慰まない様子をお知りになり、誘うていっしよに月をながめておいでになる時に使いの頭中将は二条の院へ着いたのである。夫

人は今までも煩悶はんもんは多くしてきたが、外へは出して見せまいとおさえきつてきていて、素知らぬふうを作っていたのであるから、今夜に何事があるかも知れぬとおおようにしているのを哀れにお思ひになる宮であった。頭中将の来たのをお聞きになると、さすがに宮はあちらの人もかわいそうにお思われになり、お出かけにしろうとして、

「すぐ帰つて来ます。一人で月を見てはいけませんよ。気の張り切つていない時などには危険で心配だから」

とお言ひになり、きまりの悪いお気持ちで隠れた廊下から寢殿へお行きになった。お後ろ姿を見送りながら中の君は枕まくらも浮き上がるほどな涙の流れるのをみずから恥じた。恨めしい宮に愛情を

覚えるのは恥ずかしいことであるとしていたのに、いつかそのほうへ自分は引かれていって、恨みの起こるのもそれがさせるのであると悟ったのである。幼い日から母のない娘で、この世をお愛しにもならぬ父宮を唯一の頼みにしてあの寂しい宇治の山荘に長くいたのであるが、いつとなくそれにも馴なれ、徒つれづれ然ぜさは覚えながらも、今ほど身にしむ悲しいものとは山荘時代の自分は世の中を知らなかつた。父宮と姉君に死に別れたあとでは片時も生きていられないように故人を恋しく悲しく思っていたが、命は失われずあつて、軽けいべつ蔑べつした人たちが思つたよりも幸福そうな日が長く続くものとは思われなかつたが、自分に対する宮の態度に御誠実さも見え、正妻としてお扱いになるのによつて、ようやく物思い

も薄らいできていたのであるが、今度の新しい御結婚の噂が事実
になつてくるにしたがい、過去にも知らなんだ苦しみに身を浸す
こととなつた、もう宮と自分との間はこれで終わつたと思われる、
人の死んだ場合とは違つて、どんなに新夫人をお愛しになるにも
せよ、時々はおいでになることがあるうと思つてよいはずである
が、今夜こうして寂しい自分を置いてお行きになるのを見た刹那
から、過去も未来も真ま暗くらなような気がして心細く、何を思うこ
ともできない、自分ながらあまりに狭量であるのが情けない、生
きていればまた悲観しているようなことばかりでもあるまいなど
と、みずから慰めようと中の君はするのであるが、姨捨山おばすてやまの月
(わが心慰めかねつ更科さらしなや姨捨山に照る月を見て)ばかりが澄

み昇のぼつて夜がふけるにしたがい煩悶はんもんは加わつていった。松風の音も荒かった山おろしに比べれば穏やかでよい住居すまいとしてゐるようには今夜は思われずに、山の椎しいの葉の音に劣つたように中の君は思うのであつた。

山里の松の蔭かげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

過去の悲しい夢は忘れたのであろうか。

老いた女房などが、

「もうおはいりあそばせ、月を長く見ますことはよくないことだと申しますのに。それにこの節ではちよつとしましたお菓子すら

召し上がらないのですから、こんなことでどうおなりになりますでしょう。よくございません。以前の悲しいことも私どもにお思ひ出させになりますのは困ります。おはいりあそばせ」

こんなことを言う。若い女房らは情けない世の中であると歎息をして、

「宮様の新しい御結婚のこと、ほんとうにいやですね。けれどこの奥様をお捨てあそばすことにはならないでしょう。どんな新しい奥様をお持ちになっても、初めに深くお愛しになった方に対しては情けの残るものだと言いますからね」

などと言っているのも中の君の耳にはいつてくる。見苦しいことである、もうどんなことになっても何とも自分からは言うまい、

知らぬふうでいようとこの人が思っているというのは、人には批評をさせまい、自身一人で宮をお恨みしようと思うのであるかもしれない。

「そうじゃありませんか、宮様に比べてあの中納言様の情のお深さ」

とも老いた女は言い、

「あの方の奥様になっておいでにならないで、こちらの奥様におなりになったというのも不可解な運命というものですね」

こんなこともささやき合っていたのである。

宮は中の君を心苦しく思おぼしめ召しながらも、新しい人に興味を次

々お持ちになる御性質なのであるから、先方に喜ばれるほどに美

しく装っていきたいお心から、薰くんこう香を多くたきしめてお出かけになった姿は、寸分の隙すきもないお若い貴人でおありになった。六条院の東御殿もまた華麗であつた。小柄な華きやしや奢な姫君というのではなく、よいほどな体格をした新婦であつたから、どんな人であろう、たいそうに美人がった柔らかかみのない、自尊心の強いよ
うな女ではなからうか、そんな妻であつたならいやになるであらうと、こんなことを最初はお思ひになつたのであるが、そうではないらしくお感じになつたのか愛をお持ちになることができた。秋の長夜ではあつたが、おそくおいでになつたせいでまもなく明けていった。

兵部卿の宮はお帰りになつてもすぐに西の対へおいでになれな

かつた。しばらく御自身のお居間でお寝やすみになつてから起きて新夫人の文ふみをお書きになつた。あの御様子ではお氣に入らないのもなかつたらしいなどと女房たちは陰かげぐち口をしていた。

「対の奥様がお氣の毒ですね。どんなに大きな愛を宮様が持つておいでになつても、自然けお氣押されることも起こるでしょうからね」

ただの主従でない関係も宮との間に持つている人が多かつたから、ここでも嫉妬しつとの氣はかもされているのである。あちらからの返事をここで見てからと宮は思つておいでになつたのであるが、別れて明かしたのもただの夜でないのであるから、どんなに寂しく思つていることであらうと、中の君がお氣にかかつてそのまま西の対へおいでになつた。まだ夜のまま繕つくろわれていない夫人の顔

が非常に美しく心を惹くところがあつて、宮のおいでになつたことを知りつつ寝たままであるのも、反感をお招きすることであるからと思ひ、少し起き上がっている顔の赤みのさした色などが、今朝は特別にまたきれいに見えるのであつた。何のわけもなく宮は涙ぐんでおしまいになつて、しばらく見守つておいでになるのを、中の君は恥ずかしく思つて顔を伏せた。そうされてまた、髪の毛の掛かりよう、はえようなどにたぐいもない美を宮はお感じになつた。きまりの悪さに愛の言葉などはちよつと口へ出ず、なにげないふうに分らして、

「どうしてこんなに苦しそうにばかり見えるのだろう。暑さのせいだとあなたは言つていたからやつと涼しくなつて、もういいこ

ろだと思つているのに、晴れ晴れしくないのではいけないことです
ね。いろいろ祈禱きとうなどをさせていても効験しるしの見えない気がする。
それでも祈禱はもう少し延ばすほうがいいね。効験をよく見せる
僧がほしいものだ、何々僧都そうずを夜居よいにしてあなたにつけておくの
だった」

というようなまじめらしい話をされるのにもお口じようずなの
がうとましく思われる中の君でもあつたが、何もお返辞をしない
のは平生に違つたことと思われるであらうとはばかり、

「私は昔もこんな時には普通の人のような祈禱も何もしていただ
かないで自然になおつたのですから」

と言つた。

「それでよくなおっているのですか」

と宮はお笑いになって、なつかしい愛あい嬌きょうの備わった点はこ

れに比べうる人はないであろうとお思いになったのであるが、お心の一方では新婦をなおよく知りたいとあせるところのおありになるのは、並み並みならずあちらにも愛着を覚えておいでになるのであろう。しかしながらこの人と今いつしよにおいでになっては、昨日の愛きのうが減じたとは少しもお感じにならぬのか、未来の世界までもお言いだしになって、変わらない誓いをお立てになるのを聞いていて、中の君は、

「仏の教えのようにこの世は短いものに違いありません。しかもその終わりを待ちますうちにも、あなたが恨めしいことをなさい

ますのを見なければなりませんから、それよりも未来の世のお約束のほうをお信じていていいかもしれないと思うことで、まだ懲りずにあなたのお言葉に信頼しようと思います」

と言ひ、もう忍びきれなかつたのか今日は泣いた。今日までもこんなふうに通つてゐるとはお見せすまいとして自身で紛らわしておさえてきた感情だつたのであるが、いろいろと胸の中に重なつてきて隠されぬことになり、こぼれ始めた涙はとめようもなく多く流れるのを、恥ずかしく苦しく思つて、顔をすつかり向こうに向けてゐるのを、しいて宮はこちらへお引き向けになつて、

「二人がいつしよに暮らして、同じように愛してゐるのだと思つてゐたのに、あなたのほうにはまだ隔てがあつたのですね。それ

でなければ昨夜のうちに心が変わったのですか」

「こうお言いになり宮は御自身の袖そでで夫人の涙をおぬぐいになる
と、

「夜の間の心変わりということからあなたのお気持ちがよく察せ
られます」

中の君は言つて微笑を見せた。

「ねえ、どうしたのですか、ねえ、なんとという幼稚なことをあなたは
言いだすのですか。けれどもあなたはほんとうは私へ隔てを
持つていないから、心に浮かんだだけのことでもすぐ言つてみる
のですね。だから安心だ。どんなにじょうずな言い方をしようと
も私が別な妻を一人持ったことは事実なのだから私も隠そうとは

しない。けれど私を恨むのはあまりにも世間というものを知らないからですよ。可憐かれんだが困ったことだ。まああなたが私の身になつて考えてごらんなさい。自身を自身の心のままにできないように私はなつているのですよ。もし光明の世が私の前に開けてくればだれよりもあなたを愛していた証明をしてみせることが一つあるのです。これは軽々しく口にすべきことではないから、ただ命が長くさえあればと思つていてください」

などと言つておいでになるうちに宮が六条院へお出しになつた使いが、先方で勧められた酒に少し酔い過ぎて、斟しん酌しゃくすべきことも忘れ、平気でこの西の対の前の庭へ出て来た。美しい纏てんと頭の衣類を肩に掛けていたので後朝ごちようの使いであることを人々

は知った。いつの間にお手紙は書かれたのであろうと想像するの
も快いことではないはずである。宮もしいてお隠しになろうと思
召さないのであるが、涙ぐんでいる人の心苦しさに、少し気をき
かせばよいものと、ややにがにがしく使いのことをお思いにな
ったが、もう皆暴露してしまったのであるからとお思いになり、
女房に命じて返事の手紙をお受け取らせになった。できるならば
朗らかにしていま一人の妻のあることを認めさせてしまおうと思
召して、手紙をおあけになると、それは継母ままははの宮のお手になつ
たものらしかったから、少し安心をあそばして、そのままそこへ
お置きになった。他の人の書いたものにもせよ、宮としてはお気
のひけることであつたに違いない。

私などが出すすぎたお返事をいたしますことは、失礼だと思いまして、書きますことを勧めるのですが、悩ましそうにばかりいたしておりますから、

をみなへししを萎れぞ見ゆる朝露のいかに置きける名残なごりなるらん

貴女きじよらしく美しく書かれてあつた。

「恨みがましいことを言われるのも迷惑だ。ほんとうは私はまだ当分気樂にあなたとだけ暮らして行きたかつたのだけれど」

などと宮は言っておいになつたが、一夫一婦であるのを原則とし正當とも見られている普通の人の間にあつては、良人おととが新し

い結婚をした場合に、その前からの妻をだれも憐むあわれことになつて
いるが、高い貴族をその道徳で縛ろうとはだれもしない。いずれ
はそうなるべきであつたのである。宮たちと申し上げる中でも、
輝く未来を約されておいでになるような兵部卿ひょうぶきょうの宮であつた
から、幾人でも妻はお持ちになつていいのであると世間は見てい
るから、格別二条の院の夫人が気の毒であるとも思わぬらしい。
こんなふうに夫人としての待遇を受けて、深く愛されている中の
君を幸福な人であるときえ言っているのである。

中の君自身もあまりに水も洩もらさぬ夫婦生活に慣らされてきて、
にわかになんか扱われることが歎かわしいのであろうと見えた。こ
んなに二人と一人というような関係になつた場合は、どうして女

はそんなに苦悶くもんをするのであろうと昔の小説を読んでも思い、他人のことも腑ふに落ちぬ気がしたのであるが、わが身の上になれば心の痛いものである、苦しいものであると、今になって中の君は知るようになった。宮は前よりもいつそう親しい良人ぶりをお見せになつて、

「何も食べぬということとは非常によろしくない」

などとお言いになり、良製の菓子をお取り寄せになりまた特に命じて調製をさせたりもあそばして夫人へお勧めになるのであったが、中の君の指はそれに触れることのないのを御覧になつて、「困つたことだね」

と宮は歎息をしておいでになつたが、日暮れになつたので寢殿

のほうへおいでになった。涼しい風が吹き立って、空の趣のおもしろい夕べである。はなやかな趣味を持つておいでになったから、こんな場合にはまして美しく御風ふうさい采をお作りになり出てお行きになる宮を知っていて、物哀れな夫人の心には忍び余る愁うれいの生じるのも無理でない。蝸ひぐらしの声を聞いても宇治の山陰の家ばかりが恋しくて、

おほかたに聞かましものを蝸ひぐらしの声うらめしき秋の暮れかな

と独言ひとりごとたれた。今夜はそう更ふかさずに宮はお出かけになった。

前駆の人払いの声の遠くなるとともに涙は海人あまも釣つり糸を垂たれん

ばかりに流れるのを、われながらあさましいことであると思いつつ中の君は寝ていた。結婚の初めから連続的に物思いをばかりおさせになった宮であると、その時、あの時を思うと、しまいにはうとましくさえ思われた。身体からだの苦しい原因をなしている妊娠も無事に産が済まされるかどうかからない、短命な一族なのであるから、その場合に死ぬのかもしれないなどと思つていくと、命は惜しく思われぬが、また悲しいことであるとも中の君は思った。またそうした場合に死ぬのは罪の深いことなのであるからなどと眠れぬままに思い明かした。

次の日は中ちゆうぐう宮が御病氣におなりになつたというので、皆御所へまいつたのであるが、少しの御風氣ごふうきで御心配申し上げること

もないとわかつた左大臣は、昼のうちに退出した。源中納言を誘つて同車して自邸へ向かつたのである。この日が三日の露見ろけんの式の行なわれる夜になつていた。どんなにしても華麗に大臣は式を行なおうとしていたのであろうが、こんな時のことは来賓に限りがあつて、派手はでにしようもなからうと思われた。薫かおるをそうした席へ連ならせるのはあまりに高貴なふうがあつて心恥ずかしく大臣には思われるのであるが、婿君と親密な交情を持つ人は自分の息むすこ子たちにもないのであつたし、また一家の人として他へ見せるのに誇りも感じられる薫であつたから伴つて行つたらしい。平生にも似ず兄とともに忙しい気持ちで六条院へはいつて、六の君を他人の妻にさせたことを残念に思うふうもなく、何かと式の用を兄

のために手つだつてくれるのを、大臣は少し物足らぬことに思いもした。

八時少し過ぐるころに宮はおいでのなつた。寢殿の南の間の東に寄せて婿君のお席ができていた。高脚たかあしの膳ぜんが八つ、それに載せた皿は皆きれいで、ほかにまた小さい膳が二つ、飾り脚のついた台に載せたお料理の皿など、見る目にも美しく並べられて、儀式の餅もちも供えられてある。こんなありふれたことを書いておくのがはばかりれる。

大臣が新夫婦の居間のほうへ行つて、もう夜がふけてしまったからと女房に言い、宮の御出座を促すのであつたが、宮は六の君からお離れになりがたいふうで渋つておいでのなつた。今夜の来

賓としては雲井くもいの雁夫人かりの兄弟である左衛門督さえもんのかみ、藤宰相とうさいしろうなどだけが外から来ていた。やつとしてから出ておいでになった宮のお姿は美しくごりつぱであった。主人がたの頭中將とうのが盃さかずきを御前へ奉り、膳部を進めた。宮は次々に差し上げる盃を二つ三つお重ねになった。薫が御前のお世話をして御酒みきをお勧めしている時に、宮は少し微笑をお洩もらしになった。

以前にこの縁組みの話をあそばして、堅苦しく儀礼ばることの好きな家の娘の婿になることなどは自分に不似合いなことでいである。と薫へお言いになったのを思い出しておいでになるのである。中納言のほうでは何も覚えていぬふうで、あくまで慇懃いんぎんにしていた。そしてまたこの人は東の対の座敷のほうに設けたお

供の役人たちの酒席へまで顔を出して接待をした。はなやかな殿上役人も多かつた四位の六人へは女の装束に細長、十人の五位へは三重襲がさねの唐衣からぎぬ、裳もの腰の模様も四位のとは等差があるもの、六位四人は綾あやの細長、袴はかまなどが出された纏頭てんとうであつた。この場合の贈り物なども法令に定められていてそれを越えたことはできないのであつたから、品質や加工を精選してそろえてあつた。召めしつぎむらむらい侍とねり、舍人などにもまた過分なものが与えられたのである。こうした派手はでな式事は目にもまばゆいものであるから、小説などにもまず書かれるのはそれであるが、自分に語つた人はいちいち数えておくことができなかつたそうであつた。

源中納言の従者の中に、あまり重ちようよう用ようされない男かもしれぬ

が、暗い紛れに庭の中へはいつて、それらの行なわれるのを見て来て、歎息たんそくを洩もらし、

「うちの殿様はなぜいざごぎをお言いにならないでこちらの殿様の婿におなりにならなかつたろう、つまらぬ御独身生活だ」

と中門の所でつぶやいているのが耳にはいつて中納言はおおしく思った。自身たちは夜ふけまで待たされていて、ただつまらぬ眠さを覚えさせられているだけであるのと、婿君の従者が美酒に酔わされて快くどこかの座敷で身を横たえているらしく思われるのと比較してみてうらやましかつたのであろう。

薫は家に入り寝室で横になりながら、新しい婿として式に臨むことはきまりの悪そうなことである、たいそうな恰好かっこうをした舅しゅうと

が席に出でいて、平生からなじみのある仲にもかかわらず燭ひをあかあかともして勧める盃などを宮は落ち着いて受けておいでになったのはごりつぱなものであつたなどと思ひ出してゐた。それは實際自分でもすぐれた娘というようなものを持つていけば、この宮以外には御所へでもお上げする気にはなれなかつたであらうと思われた薫は、どこの家でもにおうみや匂宮へ奉ろうとして志を得なかつた人はまだ源中納言という同じほどな候補者があると、何にも自分が宮にお並べして言われるのは世間の受けが決して悪くない自分とせねばならないなどと思ひ上がりもされた。内親王を賜わるといふ帝の思おぼしめ召しなるものが真実であれば、こんなふうに気の進まぬ自分はどうすればいいのであらう、名誉なことにもせよ、

自分としてありがたく思われない、女二によにの宮みやが死んだ恋人によく似ておいでになったならその時はうれしいであろうがとさすがに否定をしきっているのでもない中納言であつた。例のような目のさめがちな独ひとり寝のつれづれさを思つて按察使あぜちの君と言つて、他の愛人よりはやや深い愛を感じている女房の部屋へやへ行つてその夜は明かした。朝になりきればとて人が奇怪がることでもないのであるが、そんなことも気にするらしく急いで起きた薫を、女は恨めしく思つたに違いない。

うち渡し世に許しなき関川をみなれそめけん名こそ惜しけれ

と按察使は言った。哀れに思われて、

深からず上は見ゆれど関川のしもの通ひは絶ゆるものかは

薫はこう言った。恋の心は深いと言われてさえ頼みにならぬものであるのに、上は浅いと認めて言われるのに女は苦痛を覚えなかつたはずはない。妻戸を薫はあけて、

「この夜明けの空のよさを思つて早く出て見たかつたのだ。こんな深い趣を味わおうとしない人の気が知れないね、風流がる男ではないが、夜長を苦しんで明かしたのちの秋の黎明れいめいは、この世から未来の世のことまでが思われて身にしむものだ」

こんなことを紛らして言いながら薫は出て行つた。女を喜ばせうとして上手じょうずなことを多く言わないのであるが、艶えんな高雅な風ふう采うさいを備えた人であるために、冷酷であるなどはどの相手も思つていないのであつた。仮なように作られた初めの関係を、そのままにしたくなくて、せめて近くにおいて顔だけでも見ることであればというような考えを持つのか、尼になつておいでになる所にもかかわらず、縁故を捜してこの宮へ女房勤めに出ている人々はそれぞれ身にしむ思いをするものらしく見えた。

兵部卿の宮は式のあつたのちの日に新夫人を昼間御覧になることによつて、いつそう深い愛をお覚えになつた。中くらいな背丈せたくで、全体から受ける感じが清らかな人である。頬ほおにかかつた髪、

頭かしらつきはその中でも目だつて美しい。皮膚があまりにも白いにお
わしい色をした誇らかなけだか気高い顔の眸めつきはきわめて貴女らしく
て、何の欠点もない美人というほかはない。二十一、二であつた。
少女ではないから完成されぬところもなくして妍けん麗れいなる盛りの花
と見えた。大事に育てられてきた価値は十分に受けとれた。親の
愛でこれを見れば、目もくらむ美女と思われるに違いない。ただ
柔らかで愛あい嬌きょうがあつて、可憐かれんな点は中の君のよさがお思われ
になる宮であつた。話をされた時にする返辞へんじも羞はじらつてはいる
が、またたよりない気を覚えさせもしない。確かな価値の備わつ
た才女らしい姫君であつた。きれいな若い女房が三十人ほど、童
女六人が姫君付きで、そうした人の服装なども、きらきらしいも

のは飽くほど見ておいでになる ひょうぶきよう 兵部卿の宮だと思い、不思議なほど目だたぬふうに作らせてあつた。三条の夫人が生んだ長女を東宮へ奉つた時よりも今度の婿迎えを大事に夕霧の大臣は準備したというのも、宮の御声望の高さがさせたことであろう。

それからのちの宮は二条の院へ気安くおいでになることもおできにならなかつた。軽い御身分でなかつたから、昼間をそちらへ行つておいでになるといふこともむずかしくて、六条院の中の南の御殿に以前ずっとおいでになつたようにしてお住みになり、日が暮れると東御殿を余所よそにしてお出かけになることもおできにならなかつたりして、宮が幾日もおいでにならぬことのあるため、こうなることであろうとは思つたが、すぐにも露骨に冷淡なお扱

いを受けることになつたではないか、賢い人であれば自分の無価値さをよく知つて京へまでは出て来なかつたはずであつたと、今になつては返す返す宇治を離れて来たことが正氣をもつてしたことはとは思えなくて悲しい中の君は、やはりどうともして宇治へ行くとことにしたい、ここを捨てて行くふうではなくて、あちらでしばらくでも心を休めたい、反抗的に行なえば人間きも悪いであろうが、それならばいいはずである、とこの煩悶はんもんを一人で背負いきれぬように思い、恥ずかしくは思ったが源中納言に手紙を送つた。

父君の仏事の日のことは阿闍梨あじやりから報告がございました。あなたができました。あなたのように昔の名残なごりを思つてく

でございます方がありませんでしたなら、どんなに故人はみじめであつたかと思われまますにつけても御親切がうれしくばかり思われます。なおこのお礼はお目にかかれまます時に自身で申し上げたいと思ひます。

という文ふみであつた。檀紙の上の字も見栄みえをかまわずまじめな書きぶりがしてあるのであるが、それもまた美しく思われた。八の宮の御忌日に僧を集めて法事を宇治で薫が行なつてくれたのに対する礼状なのであつて、おおげさに謝意は述べてないが好意は深く認めているらしく思われた。平生はこちらから送る手紙の返事さえ気を置くふうに短くより書いて来ない人が、自身でまた口ずからお礼を申し上げたいと思うというようなことの書かれてある

ことのうれしさに薫の心はときめいた。宮がお得になつたはなやかな生活に心が多くお引かれになつて、二条の院へはよくもおいでにならないことについての中の君の煩悶はんもんも見えるのが哀れで、恋愛的なものではない手紙であるが、手から放たず何度となく薫は繰り返して読んでいた。返事は、

承りました。先日は僧のようなことを多く申して、昔のことばかりを歎いた私でしたが、それは追想にとられざるをえない時節だったからです。名残とお書きになりましたことで、私が故人の宮様にお持ちする感情を少し浅く御覧になつていらつしやるのではないかと恨めしくなります。

何も皆近く参上してお話しいたしましょう。

と、きまじめな文章が、白い厚い色紙に書いて送られた。

かおる
薫は翌日の夕方に二条の院の中の君を訪ねた。たず中の君を恋しく

思う心の添った人であるから、わけもなく服装などが気になり、

柔らかな衣服に、備わるが上の薫くんこう香をたきしめて来たのであつ

たから、あまりにも高いにおいがあたりに散り、常に使っている

丁ちようじ字染めの扇が知らず知らず立てる香などさえ美しい感じを覚

えさせた。中の君も昔のあの夜のことが思い出されることもない

のではなかったから、父宮と姉君への愛の深さが認識されるにつ

けても、運命が姉の意志のままになつていたのであつたらと心の

動揺を覚えたかもしれない。少女ではないのであるから、恨めし

い方の心と比べてみて、何につけてもりっぱな薫がわかったのか、

平生あまりに遠々しくもてなしていて気の毒であつた、人情にうとい女だとこの人が思うかもしれぬと思ひ、今日は前の室の御簾みすの中へ入れて、自身は中央の室の御簾に几帳きちょうを添え、少し後ろへ身を引いた形で対談をしようとした。

「お招きくださつたのではありませんが、来てもよろしいとお許しが珍しくいただけましたお礼に、すぐにもまいりたかつたのですが、宮様が来ておいでになると承つたものですから、御都合がお悪いかもしれぬと御遠慮を申して今日にいたしました。これは長い間の私の誠意がようやく認められてまいつたのでしようか。遠さの少し減つた御簾の中へお席をいただくことにもなりました。珍しいですね」

と薫の言うのを聞いて、中の君はさすがにまた恥ずかしくなり、言葉が出ないように思うのであったが、

「この間の御親切なお計らいを聞きまして、感激いたしました心を、いつものようによく申し上げてもいたしませんでは、どんなに私がありがたく存じておりますかしれませんような気持ちの一端をさえおわかりになりますまいと残念だったものですから」

と羞^はじらいながらできるだけ言葉を省いて言うのが絶え絶えほのかに薫へ聞こえた。

「たいへん遠いではありませんか。細かなお話もし、あなたからも承りたい昔のお話もあるのですから」

こう言われて中の君は道理に思い、少し身じろぎをして几帳の

ほうへ寄つて来たかすかな音にさえ、衝動を感じる薫であつたが、さりげなくいつそう冷静な様子を作りながら、宮の御誠意が案外浅いものであつたとお譏りそしするようにも言い、また中の君を慰めるような話をも静々としていた。中の君としては宮をお恨めしく思う心などは表へ出してよいことではないのであるから、ただ人生を悲しく恨めしく思っているというふうに分らして、言葉少なに憂鬱ゆううつなこのごろの心持ちを語り、宇治の山荘へ仮に移ることを薫の手で世話してほしいと頼む心らしく、その希望を告げていた。

「その問題だけは私の一存でお受け合ひすることができかねます。宮様へ素直すなおにお頼みになりました、あの方の御意見に従われるの

がいいと思いますがね、そうでなくば御感情を害することになつて、軽率だとお怒りになつたりしましは将来のためにもよくありません。それでなく穏やかに御同意をなされればあちらへのお送り迎えを私の手でどんなにでも都合よく計らいますのにはばかりがあるものですか。夫人をお託しになつても危険のない私であることは宮様がよくご存じです」

こんなことを言いながらも、話の中に自分は過去にしそこねた結婚について後悔する念に支配ばかりされていて、もう一度昔を今にする工夫くふうはないかということ^を常に思うとほのめかして次第に暗くなつていくころまで帰ろうとしない客に中の君は迷惑を覚えて、

「それではまた、私は身体からだの調子もごく悪いのでございますから、こんなふうでない時がございましたら、お話をよく伺わせていただきます」

と言ひ、引つ込んで行つてしまひそうになつたのが残念に思われて、薫は、

「それにしてもいつごろ宇治へおいでになろうとお思ひになるのですか。伸びてひどくなつていました庭の草なども少しきれいにさせておきたいと思ひます」

と、機嫌きげんを取るために言つと、しばらく身を後ろへずらしていた中の君がまた、

「もう今月はすぐ終わるでしょうから、来月の初めでもと思ひま

す。それは忍んですればいいでしょう。皆の同意を得たりしますようなたいそうなことにいたしませんでも」

と答えた。その声が非常に可憐かれんであつて、平生以上にも大姫君と似たこの人が薫の心に恋しくなり、次の言葉も口から出ずよりかかつていた柱の御簾の下から、静かに手を伸ばして夫人の袖そでをつかんだ。中の君はこんなことの起こりそうな予感がさつきから自分にあつて恐れていたのであると思つと、とがめる言葉も出すことができず、いつそう奥のほうへいざつて行こうとした時、持った袖について、親しい男女の間のように、薫は御簾から半身を内に入れて中の君に寄り添つて横になつた。

「私が間違つていますか、忍んでするのがいいとお言いになつた

のをうれしいことと取りましたのは聞きそこねだったのでしょうかと、それをもう一度お聞きしようと思っただけです。他人らしくお取り扱いにならないでもよいはずですが、無情なふうをなさるではありませんか」

こう薫に恨まれても夫人は返辞をする気にもならないで、思わず憎みの心の起こるのをしいておさえながら、

「なんとというお心でしょう、こんな方とは想像もできませんようなことをなさいます。人がどう思うでしょう、あさましい」

とたしなめて、泣かんばかりになつてゐるのにも少し道理はあるとかわいそうに思われる薫が、

「これくらいのごことは道徳に触れたことでも何でもありませんよ。

これほどにしてお話をした昔を思い出してください。亡なくなられた女によおう王さんのお許しもあつた私が、近づいたからといって、奇怪なことのように見ていらつしやるのが恨めしい。好色漢がするような無礼な心を持つ私でないと安心していらつしやい」

と言ひ、激情は見せずゆるやかなふうにして、もう幾月か後悔の日ばかりが続き、苦しいまでになつていく恋の悩みを、初めからこまごまと述べ続け、反省して去ろうとする様子も見せないため、中の君はどうしてよいかもわからず、悲しいという言葉では全部が現わせないほど悲しんでいた。知らない他人よりもかえつて恥ずかしく、いとわしくて、泣き出したのを見て、薫は、

「どうしたのですか、あなたは、少女らしい」

こう非難をしながらも、非常に可憐かれんでいたいたしいふうのこの人に、自身を衛まもる隙すきのないところと、豊かな貴女きじよらしさがあつて、あの昔見た夜よりもはるかに完成された美の覚えられることによつて、自身のしたことであるが、これを他の人妻にさせ、苦しい煩悶はんもんをすることとなつたとくやくしくなり、薫もまた泣かれるのであつた。夫人のそばには二人ほどの女房が侍していたのであるが、知らぬ男の闖ちんにゆう入したのであれば、なんとということをとも言つて中の君を助けに出るのであろうが、この中納言のように親しい間柄の人がこの振舞ふるまいをしたのであるから、何か訳のあることであらうと思ふ心から、近くにいることをはばかり、素知らぬ顔を作り、あちらへ行つてしまつたのは夫人のために気の毒な

ことである。中納言は昔の後悔が立ちのぼる情炎ともなつて、おさえがたいのであつたであろうが、夫人の処女時代にさえ、どの男性もするような強制的な結合は遂げようとしなかつた人であるから、ほしいままな行為はしなかつた。こうしたことを細述することはむずかしいと見えて筆者へ話した人はよくも言つてくれなかつた。

どんな時を費やしても効かいのないことであつて、そして人目に怪しまれるに違よいなことであると思つた薫は歸つて行くのであつた。まだ宵よのような氣でいたのに、もう夜明けに近くなつていた。こんな時刻では見とがめる人があるかもしれぬと心配がされたというのも中の君の名誉を重んじてのことであつた。妊娠のために

身体の調子を悪くしているという噂うわさも事実であつた。恥ずかしいことに思い、見られまいとしていた上着の腰の上の腹帯にいたましさを多く覚えて一つはあれ以上の行為に出なかつたのである、例のことではあるが臆おくびよう病なのは自分の心であると思われる薫であつたが、思いやりのないことをするのは自分の本意でない、一時の衝動にまかせてなすべからぬことをしてしまつては今後の心が静かでありえようはずもなく、人目を忍んで通つて行くのも苦勞の多いことであろうし、宮のことと、その新しいこととでもこもごもにあの人が煩悶をするであろうことが想像できるではないかなどとまた賢い反省はしてみても、それでおさえきれぬ恋の火ではなく、別れて出て来てすでもう逢いたく恋しい心はどう

しようもなかった。どうしてもこの恋を成立させないでは生きておられないようにさえ思うのも、返す返すあやなくな薰の心といふべきである。昔より少し瘦やせて、気高けだかく可憐かれんであつた中の君の面影が身に添つたままである気がして、ほかのことは少しも考えられない薰になっていた。宇治へ非常に行きたがつているようであつたが、宮がお許しになるはずもない、そうかといつて忍んでそれを行なわせることはあの人のためにも、自分のためにも世の非難を多く受けることになつてよろしくない。どんなふうな計らいをすれば、世間体のよく、また自分の恋の遂げられることにもなるであろうと、そればかりを思つて虚うつろになつた心で、物思わしそくに薰は家に寝ていた。

まだ明けきらぬころに中の君の所へ薫の手紙が届いた。例のよ
うに外見はきまじめに大きく封じた立文たてぶみであつた。

いたづらに分けつる路みちの露しげみ昔おぼゆる秋の空かな

冷ややかなおもてなしについて「ことわり知らぬつらさ」（身
を知れば恨みぬものをなぞもかくことわり知らぬつらさなるら
ん）ばかりが申しようもなくつのである。

こんな内容である。返事を出さないのもいぶかしいことに人が
見るであらうからと、それもつらく思われて、

承りました。非常に身体からだの苦しい日ですから、お返事は差し上

げられませぬ。

と中の君は書いた。

これをあまりに短い手紙であると、物足らず寂しく思い、美しかった面影ばかりが恋しく思い出された。人妻になったせい、か、むやみに恐怖するふうは見せず、貴女らしい気品も多くなつた姿で、闖入者を柔らかになつかしいふうに説いて退却させた才気などが思い出されるとともに、ねたましくも、悲しくもいろいろにその人のことばかりが思われるかおる薫は、自身ながらわびしく思った。落胆はする必要もない、宮の愛が薄くなつてしまえば、あの人は自分ばかりをたよりにするはずである、しかし公然とは夫婦になれず、世間のはばかられる二人であろうが、隠れた恋人としてお

いても、自分は他に愛する婦人を作るまい、しょうがい生涯で唯一の妻とあの人を自分だけは思つていけるであらうなどと、二条の院の夫人のことばかりを思つていけるというのもけしからぬ心である。反省している時、またその人に清い恋として告白している時には賢い人になつているのであるが、この人すら情けない愛欲から離れられないのは男性の悲哀である。大姫君の死は取り返しのならぬものであつたが、その時には今ほど薫は心を乱していなかつた。これは道義観さえ超こえていろいろな未来の夢さえ描くものを心に持つていた。

この日は二条の院へ宮がおいでになつたということを知り、
中の君の保護者をもつて任ずる心はなくして、胸が嫉妬しつとにとどろ

き、宮をおうらやましくばかり薫は思った。

宮は二、三日も六条院にばかりおいでになったのを、御自身の心ながらも恨めしく思おほしめ召されてにわかにお帰りになったのである。もうこの運命は柔順に従うほかはない、恨んでいるとは宮にお見せすまい、宇治へ行こうとしても信頼する人にうとましい心ができているのであるからと中の君は思い、いよいよ右も左も頼むことのできない身になっていると思われ、どうしても自分は薄命な女なのであるとして、生きていくうちはあるがままの境遇を認めておおようにしていようと、こう決心をしたのであったから、可憐かれんに素直にして、嫉妬しつとも知らぬふうを見せていたから、宮はいっそう深い愛をお覚えになり、思いやりをうれしくお感じになっ

て、おいでにならぬ間も忘れていたのではないということなどに言葉を尽くして夫人を慰めておいでになった。腹部も少し高くなり、恥ひずかしがっている腹帯の衣服の上に結ばれてあるのにさえ心がおひ惹かれになった。まだ妊娠した人を直接お知りにならぬ方であつたから、珍しくさえお思ひになった。何事もきれいに整い過ぎた新居においでのなつたあとで、ここにおいでのなるのはすべての点で気安く、なつかしくお思われになるままに、こまやかな将来の日の誓いを繰り返し仰せになるのを聞いていても中の君は、男は皆口が上じょうず手で、あの無理な恋を告白した人も上手に話をしたと薫のことを思い出して、今までも情けの深い人であると常に思っていたが、ああしたよこしまな恋に自分は好意を持つ

べくもないと思うことによつて、宮の未来のお誓いのほうは、そのとおりであるまいと思ひながらも少し信じる心も起こつた。それにしてもああまで油断をさせて自分の室の中へあの人がいつて来た時の驚かされようはどうだつたであろう、姉君の意志を尊重して夫婦の結合は遂げなかつたと話していた心持ちは、珍しい誠意の人と思われるのであるが、あの行為を思えば自分として気の許される人ではないと、中の君はいよいよ男の危険性に用心を感じるにつけても、宮がながく途絶えておいでにならぬことになれば恐ろしいと思われ、言葉には出さないのであるが、以前よりも少し宮へ甘えた心になつていたために、宮はなお可憐に思召され、心を惹かれておいでになつたが、深く夫人にしみついている

中納言のにおいは、薰くんこう香をたきしめたのには似ていず特異な香であるのを、においというものをよく研究しておいでになる宮であつたから、それとお気づきになつて、奇怪なこととして、何事かあつたのかと夫人を糺ただそうとされる。宮の疑つておいでになることと事実とはそうかけ離れたものでもなかつたから、何ともお答えがしにくくて、苦しそうに沈黙しているのを御覧になる宮は、自分の想像することはありうべきことだ、よも無関心ではおられまいと始終自分は思つていたのであるとお胸が騒いだ。薰のにおいは中の君が下の単衣ひとえなども昨夜のとは脱ぎ替えていたのであるが、その注意にもかかわらず全身に沁しんでいたのである。

「あなたの苦しんでいるところを見ると、進むところへまで進ん

だことだろう」

とお言いになり、追究されることで夫人は情けなく、身の置き所もない気がした。

「私の愛はどんなに深いかしのれないのに、私が二人の妻を持つようになったからといって、自分も同じように自由に人を愛しようというようなことは身分のない者のすることですよ。そんなに私
が長く帰って来ませんでしたが、それでもないではありませんか。
私の信じていたよりも愛情の淡い^{うす}あなただった」

などとお責めになるのである。愛する心からこうも思われるのであるというふうにお訊き^きになっても、ものを言わずにいる中の君に嫉妬^{しつと}をあそばして、

またびとになれける袖そでの移り香をわが身にしめて恨みつるか
な

とお言いになった。夫人は身に覚えのない罪をきせておいでになる宮に弁明もする気にならずに、

「あなたの誤解していらつしやることについて何と申し上げていかわかりません。

見なれぬる中の衣と頼みしをかばかりにてやかかけ離れなん」

と言つて泣いていた。その様子の限りなく可憐かれんであるのを宮は御覧になつても、こんな魅力が中納言を惹ひきつけたのであろうとお思ひになり、いつそうねたましくおなりになり、御自身もほろほろと涙をおこぼしになつたというのは女性的なことである。どんな過失が仮にあつたとしても、この人をうとんじてしまうことはできないふうな、美しいたいたい中の君の姿に、恨みをばかり言つておいでになることができずに、宮は歎なげいている人の機き嫌げんを直させるために言い慰めもしておいでになつた。

翌朝もゆるりと寝ておいでになつて、お起きになつてからは手ちようず水も朝の粥かゆもこちらでお済ませになつた。座敷の装飾も六条院の新婦の居間の輝くばかり朝鮮、支那しなの錦にしきで装飾をし尽くしてあ

る目移しには、なごやかな普通の家の居ごこちよさをお覚えにな
 っ、女房の中には着疲れさせた服装のも混じっていたりして、
 静かに見まわされる空気が作られていた。夫人は柔らかな淡^{うすむら}
 紫^{さき}などの上に、撫^{なでしこ}子色の細長をゆるやかに重ねていた。何一
 つ整然としていぬものもないような盛りの美人の新婦に比べてご
 らんになつても、劣つたともお思われにならず、なつかしい美し
 さの覚えられるというのは宮の御愛情に相当する人というべきで
 ありう。^{まる}円く肥えていた人であつたが、少しほつそりとなり、色
 はいよいよ白くて上品に美しい中の君であつた。怪しい疑いを起
 こさせるにおいなどのついていなかつた常の時にも、愛^{あい}嬌^{きよう}の
 ある可憐な点はだれよりもすぐれていると見ておいでになつた人

であるから、この人を兄弟でもない男性が親しい交際をして自然に声も聞き、様子もうかがえる時もあつては、どうして無関心でいられよう、必ず結果は恋を覚えることになるであらうと、宮は御自身の好色な心から想像をあそばして、これまでから恋をささやく明らかな証あかしの見える手紙などは来ていぬかとお思ひになり、夫人の居間の中の飾り棚だなや小さい唐櫃からびつなどというものの中をそれとなくお捜しになるのであつたが、そんなものはない。ただまじめなこと書かれた短い、文学的でもないようなものは、人に見せぬために別にもしてなくて、物に取り混ぜてあつたのを発見あそばして、不思議である、こんな用事を言うものにとどまるはずはないとお疑いの起こることで今日のお心が冷静にならないの

も道理である。夫人が魅力を持つばかりでなく中納言の姿もまた趣味の高い女が興味を覚えるのに十分なものであるから、愛に報いぬはずはない、よい一對の男女であるから、相思の仲にもなるであろうと、こんな御想像のされるために、宮はわびしく腹だたしく、ねたましくお思いになった。不安なお気持ち静まらぬため、その日も二条の院にとどまつておいでになることになり、六条院へはお手紙の使いを二、三度お出しになった。わずかな時間のうちにもそうも言っておやりになるお言葉が積もるのかと老いた女房などは陰口を申ししていた。

中納言はこんな宮が二条の院にとどまつておいでになることを聞いても苦しみを覚えるのであったが、自分は誤っている、愚

かな情炎を燃やしてはよろしくない、そうした愛でない清い愛で助けようと決心していた人に対して、思ふべからぬことを思つてはならぬとしいて思い返し、このままにしても、自分の気持ちは汲んでくれる人に違いないという自信の持てるのがうれしかった。女房たちの衣服がなつかしい程度に古びかかっていたようであつたのを思つて、母宮のお居間へ行き、

「品のよい女物で、お手もとにできているのがあるでしょうか、少し入り用なことがあるのです」

とお尋ねすると、

「例年の法事は来月ですから、その日の用意の白い生地などがあるだろうと思います。染めたものなどは平生たくさんは私の所に

置いてないから、急いで作らせましょう」

宮はこうお答えになつた。

「それには及びません。たいそうなことにいるのではありませんから、できているものでけっこうです」

と薫はかおる申し上げて、裁縫係りの者の所へ尋ねにやりなどして、

女の装束幾重ねと、美しい細長などをありあわせのまま使うことにして、下へ着る絹あかや綾のりぎぬなども皆添え、自身の着料にできていた紅あかい糊絹のりぎぬの樋目つちめの仕上りのよい物、白い綾の服の幾重ねへ添えたく思つた袴はかまの地がなくて付け腰だけが一つあつたのを、結んで加える時に、それへ、

結びける契りことなる下紐したひもをただひとすぢに恨みやはする

と歌を書いた。大輔たゆうの君という年のいった女房で、薫の親しい人の所へその贈り物は届けられたのである。

にわかには思い立つて集めた品ですから、よくそろいもせず見苦しいのですが、よいように取り合わせてお使いください。

という手紙が添えられてあつて、夫人の着料のものは、目だたせぬようにしてはあつたが箱へ納めてあつて、包みが別になつていた。大輔は中の君へこの報告はしなかつたが、今までからこうした好意の贈り物を受け馴なれていたことであつて、受け取らぬなどど返すべきでなかつたから、どうしたものかとも心配すること

もなく女房たちへ分け与えたので、その人々は縫いにかかつていた。若い女房で宮御夫婦のおそばへよく出る人はことにきれいにさせておこうとしたことだと思われる。下仕えの女中などの古くなった衣服を白の袷あわせに着かえさせることにしたのも目だたないこととでかえつて感じがよかった。

この夫人のために薰以外にだれがこうした物質の補いをする者があるろう、宮は夫人を愛しておいでになったから、すべて不自由のないようにと計らつてはおいでになるのであるが、女房の衣服のことまではお気のおつきにならないところであつた。大事がられて御自身でそうした物のお考えになることはなかつたのであるから、貧しさはどんなに苦しいものであるともお知りにな

らないのは道理なことである。寒けをさえ覚えるかつこう恰好で花の露をもてあそんでばかりこの世はいくもののように思っておいでになる宮とは違い、愛する人のためであるから、何かにつけて物質の補助を惜しまない薫の志をまねな好意としてありがたく思っている人たちであるから、宮のお気のつかないことと、気がよくつく薫とを比較してそし譏るようなことを言う乳母めのとなどもあった。童女の中には見苦しくなった姿で混じっていたりするのも目につくことがおりおりあったりして、夫人はそれを恥ずかしく思い、この住居すまいをしてかえって苦痛の多くなつたようにも人知れず思うことがないでもなかつたのであるのに、そしてこのごろは世の中の評判にさえなっている華美な宮の新婚後のお住居すまいの様子などを思う

と、宮にお付きしている役人たちもどんなにこちらを軽蔑するけいべつであろう、貧しさを笑うであろうという煩悶はんもんを中の君がしているのを、薫が思いやつて知っていたのであったから、妹でもない人の所へ、よけいな出すぎたことをすると思われるこんなことも、侮あなどつて礼儀を失つたのではなく、目だつようにしないのは、自分に助けられている夫人の無力を思う人があつてはならないと思う心から、忍んでする薫であつた。この贈り物があつたために、女房の身なりをととのえさせることができ、桂うちぎを織あやらせたり、綾あやを買い入れる費用も皆与えることができた。薫も宮に劣らず大事にかしずかれて育つた人で、高い自尊心も持ち、一般の世の中から超越した貴族的な人格も持つているのであるが、宇治の八の宮の

山莊へ伺うようになって以来、豊かでない家の生活の寂しきというものは想像以上のものであつたと同情を覚え、その御一家だけへではなく、物質的に恵まれない人々をあまねく救うようになったのである。哀れな動機というべきである。

薫はぜびとも中の君のために邪悪な恋は捨てて、清い同情者の地位にとどまろうとするのであるが、自身の心が思うにまかせず、常に恋しくばかり思われて苦しいため、手紙をもつて以前よりもこまごまと書き、不用意に恋の心が出たふうに見せたような消息をよく送るようになったのを、中の君はわびしいことの添ってきた運命であると歎いていた。まったく知らぬ人であつたならば、狂気の沙汰さたとたしなめ、そうした心を退けるのが容易なことであ

ろうが、昔から特別な後援者と信賴してきて、今さら仲たがいを
するのはかえつて人目を引くことになろうと思ひ、さすがにまた
薫の愛を憐む心あわれだけはあるのであつても、誘惑に引かれて相手を
しているものようにとられてはならぬとはばかりかられて煩悶はんもんが
された。女房たちも夫人の氣持ちのわかりそうな若い人らは皆新
しく京へ移つた前後から来てなじみが浅く、またなじみの深い人
たちといつては昔から宇治にいた老いた女房らであつたから、苦
しいことも左右の者に洩もらすことができず、姉君を思ひ出さぬお
りもなかつた。姉君さえおいでになれば中納言も自分へ恋をする
ようなことにはむろんならなかつたはずである、大姫君の死が
悲しく思われ、宮が二心をお持ちになり、恨めしいことも起こり

そうに予想されることよりもこの中納言の恋を中の君は苦しいことに思つた。

薫はおさえきれぬものを心に覚えて、例のとおりにしんみりとした夕方に二条の院の中の君を訪ねて来た。すぐに縁側へ敷き物を出させて、

「からだ身体を悪くしております時で、お話を自身で伺えませんが、念でございます」

と中の君が取り次がせて来たのを聞くと、薫は恨めしさに涙さえ落ちそうになつたのを人目につかぬようにしいて紛らして、

「御病氣の時には、知らぬ僧でもお近くへまいるのですから、私も医師並みに御簾みすの中へお呼びいただいてもいいわけでしょう。」

こうした人づてのお言葉は私を失望させてしまします」

と言ひ、情けなさそうにしているのを、先夜の事情を知つてい
る女房らが、

「仰せになりますとおおり、お席があまり失礼でございます」

と言ひ、中央の母屋もやの御簾を皆おろして、夜居の僧のはいる室
へ薫を案内したのを、中の君は實際身体も苦しいのであつたが、
女房もこう言っているのに、あらわに拒絶するのもかえつて人を
怪しがらせる結果になるかもしれぬと思ひ、物憂ものうく思ひながら少
しいぎつて出て話すことにした。

ごくほのかに時々ものを言う様子に、死んだ恋人の病気の初期
のころのことが思われるのもよい兆候でないと薫は非常に悲しく

なり、心が真暗まつくらになり、すぐにもものが言われず、ためらいながら、話を続けた。ずっと奥のほうに中の君のいるのも恨めしくて、御簾の下から几帳きちょうを少し押すような形にして、例のなれなれしげなふうを示すのが苦しく思われ、困ることに考えられて、中の君は少将の君という人をそばへ呼んで、

「私は胸が痛いからしばらくおさえて」

と言っているのを聞いて、

「胸はおさえるとなお苦しくなるものですが」

こう言つて歎たんそく息もを洩らしながら薫のすわり直したことにさえ、母屋もやの中の夫人は不安が感ぜられた。

「どうしてそんなに始終お苦しいのでしょうか。人に聞きますと、

初めのうちは気持ちが悪くてもまた快く癒なおっている時もあると教えてくれました。あなたはそうお言いになつて若々しく私を警戒なさるのでしよう」

と薫の言うのを聞いて中の君は恥ずかしくなつた。

「私は平生いつも胸が痛いのでございます。姉もそんなふうでございました。短命な人は皆こんなふうに煩うものだとか申します」

と言つた。だれも千年の松の命を持つていたのでないから、あるいはそんな危険が近づいているのであるかもしれないかと思つと、薫には今の言葉が身に沁しんで哀れに思われてきて、夫人がそばへ呼んだ女房の聞くのものはばかり気にはならず、きわめて悪い所だけは口にせぬものの、昔からどんなに深く愛していたかというこ

とを、中の君にだけは意味の通じるようにして言い、人には友情とより聞こえぬ上手じょうずな話し方を薰がしているために、その人は今までからだれもが言うとおりに珍しい人情味のある人であるとそばにいて思っていた。表はおおかた総あげまき角の姫君と死別した尽きもせぬ悲しみを話題にしているのであった。

「私は少年のころから、この世から離れた身になりたい、正しく仏道へ踏み入るにはどうすればよいかと願うことはそれだけだったので、前生の因縁というものだったのでしょうか、そう御接近したわけでもないあの方を恋しく思い始めました時から、私の信仰に傾いた心が違ってきました、またお死なせしてからはこちらこちらの女性と交渉を始めるともして、悲痛な心を慰めよ

うとしたこともありませんが、そんなことは何の効果もあるものでないことが確かにわかりました。私に魅力を及ぼす人がほかにはこの世にいないことがわかりましたから、好色らしいと誤解されますのは恥ずかしいのですがそうした不良性な愛であなたをお思いしてこそ無礼きわまるものでしょうが、私の望むところは淡々たるもので、ただこれほどの隔てで時々あなたへ直接その時その気持をお話し申し上げて、そしてなんとかお言葉をいただくことができます程度の睦^{むつ}まじさで御交際することはだれも非難のいたしようなないことでしょう。私の変わった性情は世間一般の人が認めているのですから、どこまでもあなたは御安心してください」

などと、恨みもし、泣きもして薫は言うのである。

「御信用しておりませんでしたなら、こんなふうには誤解もされんばかりにまであなたと近しくお話などはいたしませんでしょう。長い間、父のため、姉のために御好意をお見せくさいましたことをよく存じているものですから、普通には説明のできない間柄の保護者と御信頼申し上げて、ただ今ではこちらから何かと御無心に出したりもいたしております」

「そんなことがありましたかどうだか私に覚えはないようです。そればかりのことともたいそうにおっしやるではありませんか。今度宇治へおいでになりたいという御相談でやっと私の存在をお認めになったようなわけではありませんか。それだけでも哀れな私

は満足ができたのですよ。誠意のある者とおわかりになつてくだすつたのですから、非常にありがたく思つております」

こんなふうと言つて、かおる薫には飽き足らぬ恨めしい心は見えるのであるが、聞いている者がいるのであつては、思うままのことを言いえようはずもない。庭のほうへ目をやつて見ると、秋の日が次第に暗くなり、虫の声だけが何にも紛れず高く立っているが、築山のほうはもう闇やみになつている。こんな時間になつても驚かずしめやかなふうで柱によりかかつて、去ろうと薫のしないのの中に君はやや当惑を感じていた。「恋しさの限りだにある世なりせば」(つらきをしひて歎かざらまし)などと低い声で薫は口ずさんでから、

「私はもうしかたもない悲しみの囚とりこになってしまったのです。どこか閑居をする所がほしいのですが、宇治辺に寺というほどのものでなくとも一つの堂を作つて、昔の方の人型ひとがた（祓はらいをして人に代わつて川へ流すもの）か肖像を絵に描かかせたのかを置いて、そこで仏勤めをしようという氣に近ごろなりました」と言つた。

「身にしむお話でございますけれど、人型とお言いになりますので『みたらし川にせし禊みそぎ』（恋せじと）というようなことが起るのではないかという不安も覚えられます。代わりのものは真のものでもございませぬからよろしくございませぬから昔の人に氣の毒でございますね。黄金こがねを与えなければよくは描かいてくれませぬ

ような絵師があるかもしれぬと思われます」

こう中の君は言う。

「そうですよ。その絵師というものは決して気に入った肖像を作つてくれないでしょうからね。少し前の時代にその絵から眞実の花が降つてきたとかいう伝説の絵師がありますがね、そんな人がいてくれればね」

何を話していても死んだ人を惜しむ心があふれるように見えるのを中の君は哀れにも思い、自身にとって一つの煩わしさにも思われるのであつたが、少し御簾みすのそばへ寄つて行き、

「人型とお言いになりましたことで、偶然私は一つの話をお思い出しました」

と言ひ出した。その様子に常に超えた親しみの見えるのが薫はうれしくて、

「それはどんなお話でしょう」

こう言いながら几帳の下から中の君の手をとらえた。煩わしい気持ちに中の君はなるのであったが、どうにかしてこの人の恋をやめさせ、安らかにまじわっていきたいと思う心があるため、女房へも知らせぬようにさりげなくしていた。

「長い間そんな人のいますことも私の知りませんでした人が、この夏ごろ遠い国から出てまいりまして、私のここにいますことを聞いて音信たよりをよこしたのですが、他人とは思いませんもの、はじめて聞いた話を軽率けいそつにそのまま受け入れて親しむこともでき

ぬような気になっておりましたのに、それが先日ここへ逢あいにま
いりました。その人の顔が不思議なほど亡なくなりました姉に似て
いましたのでね、私は愛情らしいものを覚えたのです。形見に見
ようと思召すのには適当でございませんことは、女たちも姉とは
まるで違った育ち方の人のようだと言っていたことで確かでござ
います。顔や様子がどうしてあんなにも似ているのでしょうか。
それほどなつながりでもございませぬのに」

この中の君の言葉を薫はあるべからざる夢の話ではないかとま
で思つて聞いた。

「しかるべきわけのあることであなたをお慕いになつておいでに
なつたのでしよう。どうしてただ今までその話を少しもお聞かせ

くださらなかつたのでしよう」

「でも古い事実は私に否定も肯定もできなかつたのでございますからね。何のたよりになるものも持たずにさすらつてゐる者もあるだろうとおっしゃつて、気がかりなふうにお父様が時々お洩らしになりましたことなどで思い合わされることもあるのですが、過去の不幸だつた父がまたそんなことで冷嘲れいちようされますことの添いますのも心苦しゅうございまして」

中の君のこの言葉によれば、八の宮のかりそめの恋のお相手だつた人が得ておいた形見の姫君らしいと薫は悟つた。大姫君に似たと言われたことに心が惹ひかれて、

「そのよくおわかりにならないことはそのままでもいいのですか

ら、もう少しくわしくお話をしてくださいませんか」

と中納言は望んだが、羞恥しゆうちを覚えて中の君は細かなことを言
つて聞かせなかつた。

「その人を知りたく思召すのでございましたら、その辺と申すこ
とくらいはお教え申してもいいのでございますが、私もくわしく
は存じません。またあまり細かにお話をいたせばいやにおなりに
なることに違いございませんし」

「幻術師を遠い海へつかわされた話にも劣らず、あの世の人を捜
し求めたい心は私にもあるのです。そうした故人の生まれ変わ
りの人と見ることはできなくても、現在のよ様な慰めのない生活
をしているよりはと思う心から、その方に興味が持たれます。人型

として見るのに満足しようとする心から申せば山里の御堂みでうの本尊を考へないではおられません。なおもう少し確かな話を聞かせてくださいませんか」

中納言は新しい姫君へにわかに関心を持ち出して中の君を責めるのだった。

「でもお父様が子と認めてお置きになつたのでもない人のことを、こんなにお話ししてしまいますのは軽率なことなのですが、神通力のある絵師がほしいとお思ひになるあなたをお氣の毒に思うものですから」

こう言つてから、さらに、

「長く遠い国などで育てられていましたことで、その母が不憫ふびんが

りまして、私の所へいろいろと訴えて来ましたのを、冷淡に取り合わずにいることはできませんうちに、ここへまいったのです。ほのかにしか見ることができませんでしたせいですか、想像していましたよりは見苦しくなく見えました。どういふ結婚をさせようかと、それを母親は苦勞にしている様子でしたが、あなたの御堂の仏様にしていただきますことはあまりに過分なことだと思いません。それほどの資格などはどうしてあるものではありません」

など夫人は言った。それとなく自分の恋を退ける手段として中の君の考えついたことであろうと想像される点では恨めしいのであったが、故人に似たという人にはさすがに心の惹ひかれる薫であ

つた。自分の恋をあるまじいこととは深く思いながらも、あらわに侮蔑ぶべつを見せぬのも中の君が自分へ同情があるからであろうと思われ、点で興奮をして中納言が話し続けているうちに夜もふけわたったのを、夫人は人目にどう映ることかという恐れを持って、相手の隙すきを見て突然奥へはいつてしまったのを、返す返すも道理なことであると思いつながら、薫は、恨めしい、くちおしい気持ちで、静められなくて涙までもこぼれてくる不体裁さに恥じられ、そして、複雑な悶もだえをしながらも、感情にまかせた乱暴な行為に出ることは、恋人のためにも自分のためにも悪いことであろうと、しいて反省をして、平生よりも多く歎息をしながら辞去した。

こんなに恋しい心はどう処理すればいいのであろう、これが続

いていくばかりでは苦しさに堪えられなくなるに違いない、どんなにすれば世間の非難も受けず、しかも恋のかなうことになるであろうなどと、多くの恋愛に鍛え上げてきた心でない青年の中納言であるせいか、自身のためにも中の君のためにも無理で、どうして平和な道のありえない思いをし続けてその夜は明かした。似ているとあの人が言った人をそのとおりに信じて情人の関係を結ぶようなことはできない、地方官階級の家で養われている人であれば、こちらで行なおうとすることに障害になるものもないであろうが、当人の意志でもない関係を結ぶのはおもしろくないことに相違ないなどと思い、話を聞いた時には一時的に興奮を感じたものの、冷静になってみれば心をさほど惹く価値もないことと薫

はしているのであった。

宇治の山莊を長く見ないでいるといつそうに恋しい昔と遠くなる気がして心細くなる薫は、九月の二十幾日に出かけて行つた。主人のない家は河風かわかぜがいつそう吹き荒らして、すごい騒がしい水音ばかりが留守居をし、人影も目につくかつかぬほどにしか徘徊はいかいしていかない。ここに來てこれを見た時から中納言の心は暗くなり、限りもない悲しみを覚えた。弁の尼に逢あいたいとと言うと、障子口をあけ、青鈍色あおにびの几帳のすぐ向こうへ來て挨拶あいさつをした。「失礼なのでございますが、このごろの私はまして無気味な姿になつていたのでございますから、御遠慮をいたすほうがよいと思われまして」

と言い、顔は現わさない。

「どんなにあなたが寂しく暮らしておいでになるだろうと思うと、そのあなただけが私の悲しみを語る唯一の相手だと思われて出て来ましたよ。年月はずんずんたっていきました、あれから」

涙を一目浮かべて薫がこう言った時、老女はましてとめようもない泣き方をした。

「御自身のためでなく、お妹様のために深い物思いを続けておいでになったところは、こんな秋の空であつたと思ひ出しますと、いつでも寂しい私ではございまして、特別に秋風は身に沁しんで辛つらうございます。実際今になりますと、大姫様の御心配あそばしましたのがごもつともなような現象が京では起こってまいったよう

にここでも承りますのは悲しゆうございます」

「一時はどんなふうに見えることがあつても、時さえたてばまた旧態にもどるものであるのに、あの方が一途に悲観をして病氣まで得ておしまいになつたのは、私がよく説明をしなかつたあやまりだと、それを思うと今も悲しいのですよ。中姫君の今経験しておられるようなことは、まず普通のことと言わねばなりませんまい。決して宮の御愛情は懸念を要するような薄れ方になつていないと思われます。それよりも言つても言つても悲しいのはやはり死んだ方ですよ。死んでしまつてはもう取り返しようがない」

と言つて薫は泣いた。

あじやり

薫は阿闍梨を寺から呼んで、大姫君の忌日の法会ほうえに供養する経

巻や仏像のことを依託した。また、

「私はこんなふうには時々ここへ来ますが、来てはただ故人の死を悲しむばかりで、靈魂の慰めになることでもない無益な歎きをせぬために、この寢殿を壊こぼつてお山のそばへ堂にして建てたく思うのです。同じくは速くそれに取りかからせたいと思つています」

とも言い、堂を幾つ建て、廊をどうするかということについて、それぞれ書き示しなど薫のするのを、阿闍梨は尊い考えつきであると並み並みならぬ賛意を表していた。

「昔の方が風雅な山荘として地を選定してお作りになつた家を壊こぼつことは無情なことのようにでもありますが、その方御自身も仏教を唯一の信仰としておられて、すべてを仏へささげたく思召して

もまた御遺族のことをお思いになって、そうした御遺言はしておかれなかつたのかと解釈されます。今では兵部卿親王の夫人の御所有とすべき家であつてみれば、あの宮様の御財産の一つですから、このお邸やしきのままです。寺にしては不都合でしょう。私としてもかつてにそれはできない。それに地所もあまりに川へ接近して、川のほうから見え過ぎる、ですから寢殿だけを壊こぼつて、こへは新しい建物を代わりに作つて差し上げたい私の考えです」と薫が言う、

「きわめて行き届いたお考えでけっこうです。最愛の人を亡なくしましてから、その骨を長年袋へ入れ頸くびへ掛けていた昔の人が、私の御方便でその袋をお捨てさせになり、信仰の道へはいったとい

う話もございます。この寝殿を御覧になるにつけましてもお心を悲しみに動かすということはむだなことです。御堂をお建てになることは多くの人を新しく道に導くよき方法でもあり、御靈魂をお慰め申すにも役だつことでもございます。急いで取りかかりましょう。陰陽おんようの博士はかせが選びます吉日に、経験のある建築師二、三人をおよこしてくださいましたならば、細かなことはまた仏家の定式がありますから、それに準じて作らせることにいたしまししょう」

阿闍梨はこう言つて受け合つた。いろいろときめることをきめ、領地の預かり人たちを呼んで、御堂の建築の件について、すべて阿闍梨の命令どおりにするようにと薫は言いつけたりしているう

ちに短い秋の日は暮れてしまったので、山荘で一泊していくことに薰はした。

この寝殿を見ることも今度限りになるであろうと思い、薰はあちらこちらの間をまわって見たが、仏像なども皆御寺のほうへ移してしまったので、弁の尼のお勤めをするだけの仏具が置かれてある寂しい仏室ぶつまを見て、こんな所にどんな気持ちで彼女は毎日暮らしているのであろうと薰は哀れに思った。

「この寝殿は建て直させることにします。でき上がるまでは廊の座敷へ住んでおいでなさい。二条の院の女によおう王様のほうへお送りすべきものは私の莊園の者を呼んで持たせておあげなさい」

などと薰はこまごまとした注意までも弁の尼にしていた。ほか

の場所ではこんな老いた女などは視野の外に置いて関心を持たずにいるのであろうが、弁に対しては深い同情を持つ薫は、夜も近い室へ寝させて昔の話をした。弁も聞く人のないのに安心して、
藤大納言のことなどもこまごまと薫に聞かせた。

「もう御容体がおむずかしくなりましたから、お生まれになりました方をしきりに見たく思召す御様子のごございましたのが始終私には忘れられないことだったのでございましたのに、その時から申せばずっと末の世になりました、こうしてお目にかかることができますのも、大納言様の御在世中真心でお仕えいたしました報いが自然に現われてまいりましたのかと、うれしくも悲しくも思
い知られるのでございます。長過ぎる命を持ちまして、さまざま

の悲しいことにあうと申す私の宿命が恥ずかしく、情けなくてなりません。二条の院の女王様から時々逢いに出て来い、それきり来ようとしなのは私を愛していないのだらうなどとおつしやつてくださるおりもございますが、縁起の悪い姿になった私は、もう阿弥あみだ陀様以外にお逢い申したい方もございませぬ」

などと弁の尼は言った。大姫君の話も多く語った。親しく仕えて見聞きした話をし、いつどんな時にこうお言いになったとか、自然の風物に心の動いた時々、故人の詠よんだ歌などを、不似合いな語り手とは見えずに、声だけは慄ふるえていたが上手じょうずに伝え、おおようで言葉の少ない人であったが、そうした文学的などころもあつたかと、薫はさらに故人をなつかしく思った。宮の夫人は

それに比べて少し派手はでな性質であつて、心を許さない人には毅然きぜんとした態度もとる型の人らしくはあるが、自分へは同情が深く、どうして自分の恋から身はずそう、事のない友情だけで永久に親しみたいと思うところがあると薫は二人の女王を比較して思つたりした。こんな話のついでにあの人型のことを薫は言い出してみた。

「京にこのごろその人はいるのでございますかねえ。昔のことを私は人から聞いて知っているだけです。八の宮様がまだこの山荘へおいでになりませぬ以前のこと、奥様がお亡かくれになつて近いころに中将の君と言つておりました、よい女房で、性質などもよい人を、宮様はかりそめなように愛人にあそばしたのを、

だれも知った者はございませんでしたところ、女の子をその人が生みました時に、宮様がそんなことが起こるかもしれぬという懸^{ねん}念を持っておいでになったものですから、それ以後の御態度がすっかりと変わりました、絶対にお近づきになることはなかったのでございます。それが動機でありのすさびというものにお懲りになりました、坊様と同じ御生活をあそばすことになったので、中将はお仕えしていただきますこともきまり悪くなりましたして下がったのですが、それからのに陸奥^{むつのかみ}守の家内になって任国へ行っておりまして、上京しました時に、姫君は無事に御成長なさいましたとこちらへほのめかしてまいりましたのを、宮様がお聞きになりまして、そんな音信^{たより}をこちらへしてくる必要はないはずだと言いつ

つておしまいになりましたので、中將は歎いていたと申します。それがまた主人が常陸介ひたちのすけになつていつしよに東へあずままいりましたが、それきり消息をだれも聞かなかつたのでございます。この春常陸介が上つてまいりまして、中將が中の君様の所へ訪ねたずてまいりましたと申すことはちよつと聞きましたでございます。姫君は二十くらいになつていらつしやるのでしよう。非常に美しい方におなりになつたのを拝見する悲しさなどを、まだ中將さんの若いころ小説のようにして書いたりしたこともございました」

すべてを聞いた薫は、それではほんとうのことらしい。その人を見たいという心が起こつた。

「昔の姫君に少しでも似た人があれば遠い国へでも尋ねて行きた

い心のある私なのだから、子として宮がお数えにならなかつたとしても結局妹さんであることは違いのないことなのですから、私のこの心持ちをわざわざ正面から伝えるようにはなく、こう言っていたとだけを、何かの手紙が来たついでにでも言っておいてください」

とだけ薫は頼んだ。

「お母さんは八の宮の奥様の姪めいにあたる人なのでございます。私とも血の続いた人なのですが、昔は双方とも遠い国に住んでいまして、たびたび逢うようなことはなかつたのでございます。先日京から大輔たゆうが手紙をよこしまして、あの方がどうかして宮様のお墓へでもお行きになりたいと言っていていらつしやるから、そのつも

りでということでしたが、中将からは久しぶりの音信たよりというものもくれません。でございますからそのうちこちらへお見えになるでしょう。その節にあなた様の仰せをお伝えいたしましょう」

夜が明けたので薫は帰ろうとしたが、昨夜遅れて京から届いた絹とか綿とかいうような物を御寺みでらの阿闍梨あじやりへ届けさせることにした。弁の尼にも贈った。寺の下級の僧たち、尼君の召使いなどのために布類までも用意させてきて薫は与えたのだった。心細い形の生活であるが、こうして中納言が始終補助してくれるために、気楽に質素な暮らしが弁にできるのである。

堪えがたいまでに吹き通す木枯こがらしに、残る枝もなく葉を落とした紅葉もみじの、積もりに積もり、だれも踏んだ跡も見えない庭になが

め入つて、帰つて行く気の進まなく見える薫であつた。よい形をした常磐木ときわぎにまとつた蔦つたの紅葉だけがまだ残つた紅あかさであつた。こだにの蔓つるなどを少し引きちぎらせて中の君への贈り物にするらしく薫は従者に持たせた。

し やどり木と思ひ出いでずば木のもとの旅寝もいかに寂しからまし

と口ずさんでいるのを聞いて、弁が、

荒れはつる朽ち木のもとを宿り木と思ひおきけるほどの悲し

さ

という。あくまで老いた女らしい尼であるが、趣味を知らなくないことで悪い気持ちは中納言にしなかつた。

二条の院へ宿り木の紅葉を薫の贈つたのは、ちようど宮が来ておいでになる時であつた。

「三条の宮から」

と言つて使いが何心もなく持つて来たのを、夫人はいつものとおり自分の困るようなことの書かれてある手紙が添っているのではないかと気にしていたが隠しうるものでもなかつた。宮が、

「美しい蔦だね」

と意味ありげにお言いになって、お手もとへ取り寄せて御覧になるのであつたが、手紙には、

このごろはどんな御様子でおられますか。山里へ行つてまいりまして、さらにまた峰の朝霧に悲しみを引き出される結果を見ました。そんな話はまたまいつて申し上げましょう。あちらの寢殿を御堂に直すことを阿闍梨あじやりに命じて来ました。お許しを得ましてから、他の場所へ移すことにも着手させましょう。弁の尼へあなたから御承諾になるならぬをお言いやりになってください。

こう書かれてあつた。

「よくもしらじらしく書けた手紙だ。私がこちらにしていると聞いて

いたのだろうか」

と宮はお言いになるのであつた。少しはそうであつたかもしれない。夫人は用事だけの言われてあつたのをうれしく思つたのであるが、どこまでも疑つたものの言いようを宮があそばすのをうるさく思い、恨めしそうにしている顔が非常に美しく、この人が犯せばどんな過失も許す気になるであらうと宮は見ておいでになつた。

「返事をお書きなさい。私は見ないようにしているから」

宮はわざとほかのほうへ向いておしまいになつた。そうお言いになつたからと言って、書かないでは怪しまれることであらうと夫人は思い、

山里へおいでになりましたことはおうらやましいことと承りました。あちらは仰せのように御堂にいたすのがよろしいことと思っております。しかしまた私自身のために隠れ家として必要のあることを思い、荒廃はいたさせたくない願いもあつたのですが、あなたのお計らいで両様の望みがかないますればありがたいことと存じます。

と返事を書いた。こんなふうの友情をかわすだけの二人であるうと思っておいでになりながらも、御自身のお心慣らいから秘密があるように察せられて、御不安がのけがたいのであろう。枯れ枯れになった庭の植え込みの中の薄がすすき何草よりも高く手を出して招いている形が美しく、また穂を持たないのも露を貫き玉を掛け

た身をなびかせていることなどは平凡なことであるが夕風の吹いている草原は身にしむことが多いものである。

穂にいでぬ物思ふらししのすすき招く袂の露しげくして

柔らかなになったお小袖こそでの上に直衣のうしだけをお被きになり、琵琶びわを宮は弾ひいておいでになった。黄鐘調おうじきちょうの搔かき合わせに美しい音を出しておいでになる時、夫人は好きな音楽であつたから、恨めしいふうばかりはしておられず、小さい几帳きちょうの横きょうから脇きょうそく息いきによりかかつて少し姿を現わしているのが非常に可憐かれんに見えた。

「あきはつる野べのけしきもしの薄ほすすきのめく風につけてこそ知
れ

『わが身一つの』（おほかたのわが身一つのうきからになべての
世をも恨みつるかな）

と云ううちに涙ぐまれてくるのも、さすがに恥ずかしく扇で紛
らしているその気分も愛すべきであると宮はお思われになるので
あるが、こんな人であるからほかの男も忘れがたく思うのである
うと疑いをお持ちになるのが夫人の身に恨めしいことに相違ない。
白菊がまだよく紫に色を変えないで、いろいろ繕われてあるのは
ことに移ろい方のおそい中にどうしたのか一本だけきれいに紫に

なっているのを宮はお折らせになり「はなのなかにひとへにきくをあいす花中偏愛菊」

と誦ずしておいでになつたが、

なにがし「某親王がこの花を愛しておいでになつた夕方ですよ、天人が飛んで来て琵琶びわの手を教えたというのはね。何事もあさはかになつて天人の心を動かすような音楽というものはもはや地上からなくなつてしまつたのは情けない」

とお言いになり、樂器を下へ置いておしまいになつたのを、中の君は残念に思い、

「人間の心だけはあさはかにもなつたでしょうが、昔から伝わっております音楽などはそれほどにも墮落はしておりませんでし
う」

こう言つて、自身でおぼつかなくなっている手を耳から探り出したいと願うふうが見えた。宮は、

「それでは単独ひとりで弾ひいているのは寂しいものだから、あなたが合あわせなさい」

とお言いになつて、女房に十三絃げんをお出させになつて、夫人に弾かせようとあそばされるのだつたが、

「昔は先生になつてくださる方がございましたけれど、そんな時にもろくろく私はお習い取りすることはできなかつたのですもの」
恥はずかしそうに言つて、中の君は楽器に手を触れようともしない。

「これくらいのことにもまだあなたは隔へてというものを見せるの

は情けないではありませんか、このごろ通つて行く所の人は、まだ心が解けるといふほどの間柄になつていないのに、未成品的な琴を聞かせなさいと言へば遠慮をせずに弾きますよ。女は柔らかい素直なのがいいとあの中納言も言つていましたよ。あの人へはこんなに遠慮をばかり見せないのでしょうか。非常な仲よしなのだから」

などと薫かおるのことまでも言葉に出してお恨みになつたため、夫人は歎息をしながら少し琴を弾いた。近ごろ使われぬ琴は緒がゆるんでいたのでから盤ばん涉じきちよう調てうにしてお合わせになつた。夫人の搔かき合あわせの爪つま音おとが美しい。催馬樂さいばらの「伊勢いせの海」をお歌いになる宮のお声の品よくおきれいであるのを、そつと几帳きちょうの後のちろなどへ来

て聞いていた女房たちは満足した笑^えみを皆見せていた。

「二人の奥様をお持ちあそばすのはお恨めしいことですが、それも世のならわしなのですからね、やはりこの奥様を幸福な方と申し上げるほかはありませんよ。こうした所の大事な奥様になつてお暮らしになる方とは思ふこともできませんようでしたもとの生活へ、また帰りたいようによくおつしやるのはどうしたことでしょう」

といちずになつて言う老いた女房はかえつて若い女房たちから、「静かになさい」

と制されていた。

琵琶^{びわ}などをお教えになりながら三、四日二条の院に宮がとどま

つておいでになり、謹慎日になつたからというような口実を作つて六条院へおいでにならないのを左大臣家の人々は恨めしがつてい、大臣が御所から退出した帰り路みちに二条の院へ出て来た。

「たいそうなふうをして何しにおいでになつたのかと言いたい」
などとお言いになり、宮は不機嫌ふきげんになつておいでになつたが、
客殿のほうへ行つて御面会になつた。

「何かの機会のない限りはこの院へ上がることがなくなつております私には目に見るものすべてが身に沁しんでなりません」

とも言い、六条院のお話などをしばらくしていたあとで、大臣は宮をお誘い出して行くのであつた。子息たちその他の高級役人、殿上役人なども多く引き連れてある勢力の偉大さを見て、比較に

もならぬ世間的に無力な身の上を中の君は思つてめいつた気持ちになつていた。女房らはのぞきながら、

「ほんとうにおきれいな大臣様、あんなにごりっぱな御子息様たちで、皆若盛りでお美しいと申してよい方たちが、だれもお父様に及ぶ方はないじゃありませんか、なんとという美男でいらつしやるのでしよう」

と中には言う者もあつた。また、

「あんなおおぎようなふうをなすつて、わざわざお迎えなどにおいでになるなんてくちおしい。世の中つて楽なものではありませんね」

と歎息する女もあつた。夫人自身も寂しい来し方を思い出し、

あのはなやかな人たちの世界のいちぢくう隅を占めることは不可能な影の淡い身の上であることがいよいよ心細く思われて、やはり自分は宇治へ隠退してしまうのが無難であろうと考えられるのであつた。

日は早くたち年も暮れた。一月の終わりから普通でない身体の苦痛を夫人は感じだしたのを、宮もまだ産をする婦人の悩みをお見になった御経験はなかつたので、どうなるのかと御心配をあそばして、今まできとう祈禱などをほうぼうでさせておいでになつた上に、さらにほかでも修法を始めることをお命じになつた。非常に容体が危険に見えたために、ちゅうぐう中宮からもお見舞いの使いが来た。中の君が二条の院へ迎えられてから足かけ三年になるが、御良人の

宮の御愛情だけはおろそかなものでないだけで、一般からはまだ直接親王夫人に相当する尊敬は払われていなかったのに、この時にはだれも皆驚いて見舞いの使いを立て、自身でも二条の院へ来た。

源中納言は宮の御心配しておいでのなるのにも劣らぬ不安を覚えて、気づかわしくてならないのであつても、表面的な見舞いに行くほかは近づいて尋ねることもできずに、ひそかに祈祷などをさせていた。この人の婚約者の女にょに二の宮みやの裳着もぎの式が目前のことになり、世間はその日の盛んな儀礼の用意に騒いでいる時であつて、すべてを帝御みかど自身が責任者であるようにお世話をあそばし、これでは後援する外がいせき戚せきのないほうがかえつて幸福が大きいとも

見られ、亡なき母君の藤壺ふじつぼの女御にょごが姫宮のために用意してあつた数々の調度の上に、宮中の作つくり物のどころ所とか、地方長官などとかへ御下命になつて作製おさせになつたものが無数にでき上がつてい、その式の済んだあとで通い始めるようにとの御内意が薫へ伝達されている時であつたから、婿方でも平常と違ふ緊張をしていはずであるが、なおいままでどおりにそちらのことはどうでもいいと思われ、中の君の産の重いことばかりを哀れに思つて歎息を続ける薫であつた。

二月の朔ついたち日に直なお物しものといつて、一月の除目じせくの時にし残された官吏の昇任更任の行なわれる際に、薫は権大納言ごんになり、右大將を兼任することになつた。今まで左大將を兼ねていた右大臣が

軍職のほうだけを辞し、右が左に移り、右大将が親補されたのである。新任の挨拶あいさつにほうぼうをまわった薫は、兵部卿ひょうぶきょうの宮へもまいった。夫人が悩んでいる時であつて、宮は二条の院の西の対においでになつたから、こちらへ薫は来たのであつた。僧などが来ていて儀礼を受けるには不都合な場所であるのにと宮はお驚きになり、新しいお直衣のうしに裾すその長い下襲したかさねを召してお身なりをおととのえになつて、客の礼に対する答とうの拜礼を階下へ降りてあそばされたが、大将もりつぱであつたし、宮もきわめてごりつぱなお姿と見えた。この日は右近衛府うごんえふの下僚の招宴をして纏頭てんとうを出すならわしであつたから、自邸では言つていたが、近くに中の君の悩んでいる二条の院があることで少し躊躇ちゆうちよ躊躇ちよしている

と、夕霧の左大臣が弟のために自家で宴会をしようと言いだしたので六条院で行なつた。皇子がたも相伴の客として宴にお列つらなりになり、高級の官吏なども招きに応じて来たのが多数にあつて、新任大臣の だいきようえん 大饗宴にも劣らない盛大な、少し騒がし過ぎるほどのものになつた。兵部卿の宮も出ておいでになつたのであるが、夫人のことがお気づかわしいために、まだ宴の終わらぬうちに急いで二条の院へお帰りになつたのを、左大臣家の新夫人は不満足に思い、ねたましがつた。同じほどに愛されているのであるが権家の娘であることに驕おごつてゐる心からそう思われたのであろう。

ようやくその夜明けに二条の院の夫人は男児を生んだ。宮も非常にお喜びになつた。右大将も昇任よろこの悦びと同時にこの報を得る

ことのできたのをうれしく思った。昨夜の宴に出ていただいたお礼を述べに来るのとともに、御男子出産の喜びを申しに、薫は家へ帰るとすぐに二条の院へ来たのであった。

兵部卿の宮がそのままずっと二条の院におられたから、お喜びを申しに伺候しない人もなかった。産^{うぶやしな}養^いの三日の夜は父宮のお催しで、五日には右大将から産養を奉った。屯^{とんじき}食^{じき}五十具、碁^ご手の錢、椀^{おうばん}飯^{はん}などという定まったものはその例に従い、産婦の夫人へ料理の重ね箱三十、嬰兒^{えいじ}の服を五枚重ねにしたもの、襦^{むつぎ}袢^{ばん}などに見だため華奢^{かしや}の尽くされてあるのも、よく見ればわかるのであった。父宮へも浅香木の折敷^{おしき}、高^{たかつき}坏^{つき}などに料理、ふずく（麵^{めん}類^{るい}）などが奉られたのである。女房たちは重詰めの料理の

ほかに、籠かご入りの菓子三十が添えて出された。たいそうに人目を引くことはわざとしなかつたのである。七日の夜は中宮からのお産養であつたから、席つらなに列る人が多かつた。中宮大夫だゆうを初めとして殿上役人、高級官吏は数も知れぬほどまいったのだつた。帝も出産を聞きこしめ召して、兵部卿の宮がはじめて父になつた喜びのしるしをせひとも贈るべきであると仰せになり、太刀たちを新王子に賜わつた。九日も左大臣からの産養があつた。愛嬢の競争者の夫人を喜ばないのであるが、宮の思召しをはばかつて、当夜は子息たちを何人も送り、接客の用を果たさせもした。

夫人もこの幾月間物思いをし続けると同時に、身体の苦しきも並み並みでなく、心細くばかり思つていたのであつたが、こうし

たはなやかな空気に包まれる日が来て少し慰んだかもしれない。

右大将はこんなふう^にに動揺されぬ位置が中の君にできてしまい、王子の母君となつてしまつては、自分の恋に対して冷淡さが加わるばかりであろうし、宮の愛はこの夫人に多く傾くばかりであろうと思われるのはくちおしい気のすることであつたが、最初から願つていた中の君の幸福というものがこれで確實になつたとする点ではうれしく思わないではいらなかつた。

その月の二十幾日に女二の宮の裳着の式が行なわれ、翌夜に右大将は藤壺^{ふじつぼ}へまいった。これに儀式らしいものはなくて、ひそかなことになつていた。天下の大事のように見えるほどおかしきになつた姫宮の御良人^{おつと}に一臣下の男がなるのに不満が覚えられ

る。婚約はお許しになっておいても、結婚をそう急いでおさせに
ならないでもよいではないかと非難らしいことを申す者もあつた
が、お思い立ちになったことはすぐ実行にお移しになる帝の御性
みかど
質から、過去に例のないまで帝の婿として薫を厚遇しようとお考
えになつてあそばすことらしかった。帝の御婿になる人は昔も今
もたくさんあろうが、まだ御盛んな御在位中にただの人間のよう
に婿取りに熱中あそばしたというようなことは少なかったであろ
う。左大臣も、

「右大将はすばらしい運命を持った男ですね。六条院すら朱雀院
すざく
の晩年に御出家をされる際にあの母宮をお得になつたくらいのこと
とだし、私などはましてだれもお許しにならないのをかつてに拾

つたにすぎない」

こんなことを言った。夫人の宮はそのとおりであつたことがお
 恥ずかしくて返辞をあそばすこともできなかつた。

三日目の夜は おおくらぎよう 大蔵卿を初めとして、女二の宮の後見に帝の

あてておいでになる人々、宮付きの役人に仰せがあつて、右大将
 の前駆の人たち、隨身、車役、舎人とねりにまで纏頭てんとうを賜わつた。普

通の家の新郎の扱い方に少しも変わらないのであつた。それから
 のちは忍び忍びに藤壺へ薫は通つて行つた。心の中では昔のこと、
 昔にゆかりのある人のことばかりが思われて、昼はひねもす物思
 いに暮らして、夜になるとわが意志でもなく女二の宮をお訪ねに
 行くのも、そうした習慣のなかつた人であるからおつくうで苦し

く思われる薫は、御所から自邸へ宮をお迎えしようと考えついた。そのことを尼宮はうれしく思召おほしめして、御自身のお住居すまいになつてゐる寢殿を全部新婦の宮へ譲ろうと仰せになつたのであるが、それはもつたいないことであると薫は言つて、自身の念誦講堂ねんずとの間に廊を造らせていた。西側の座敷のほうへ宮をお迎えするつもりらしい。東の対なども焼けてのちにまたみごとな建築ができていたのをさらに設備を美しくさせていた。薫のそうした用意おつとをしていることが帝のお耳にはいり、結婚してすぐに良人の家へはいるのはどんなものであらうと不安に思召されるのであつた。帝も子をお愛しになる心の闇やみは同じことなのである。尼宮の所へ勅使がまいり、お手紙のあつた中にも、ただ女二の宮のことばかりが

書かれてあつた。お亡なくなりになつた朱雀院が特別にこの尼宮を御援助になるようにと遺託しておありになつたために、出家をされたのちでも二品にほん内親王の御待遇はお変えにならず、宮からお願いになることは皆御採用になるといふほどの御好意を帝は示しておいでになつたのである。こうした最高の方を舅しゅうとぎみ君とし、母宮として、たいせつにお扱われする名誉もどうしたものか薫の心には特別うれしいとは思われずに、今もともすれば物思い顔をしていて、宇治の御堂の造営を大事に考えて急がせていた。

兵部卿の宮の若君の五十日になる日を数えていて、その式用の祝いの餅もちの用意を熱心にして、竹の籠かご、檜ひのきの籠なども自身で考案した。沈じんの木、紫檀したん、銀、黄金などのすぐれた工匠を多く家

に置いている人であつたから、その人々はわれ劣らじと製作に励んでいた。

薫はまた宮のおいでにならぬひまに二条の院の夫人を訪れた。

思ひなしか重々しさと高貴さが添つたように中の君を薫は思つた。もう薫は結婚もしたのであるから、自分の迷惑になるような気持ちは皆紛れてしまつているであらうと安心して夫人は出て来たのであつたが、やはり同じように寂しい表情をし、涙ぐんでいて、「自分の意志でない結婚をした苦痛というものはまた予想外に堪えられないものだとわかりまして、はんもん煩悶ばかりが多くなりまして」

と、新婦の宮に同情の欠けたようなことをかおる薫は言つて夫人に訴

えた。

「とんだことをおつしやいます。そういうことをいつの間にか人が聞くようになってはたいへんですよ」

こう中の君は言いながらも、だれが見ても光榮の人になつていて、それにも慰められずまだ故人が忘れられないように言うこの人の愛の純粹さをうれしく思つていた。姉君が生きていたらとも思うのであつたが、しかしそれも自分と同じように勝ち味のない競争者を持つて薄運を歎くにとどまることになつたであらう、富のない自分らは世の中から何につけても尊重されていくものではないらしいとまた思うことによつて姉君がどこまでも情に負けず結婚はせまいとした心持ちのえらさが思われた。

薫が若君をせひ見せてほしいと言っているのを聞いて、恥ずかしくは思いながら、この人に隔て心を持つようには取られたくない、無理な恋を受け入れぬと恨まれる以外のこと、この人の感情は害したくないと中の君は思い、自身では何とも返辞をせず、めのと乳母に抱かせた若君を御簾みすの外へ出して見せさせた。いうまでもなく醜い子であるはずはない。驚くほど色が白く、美しくて、高い声を立てて笑えんでみせる若君を見て薫は、これが自分の子であったなраと思ひ、うらやましい気のしたというのは、この人の心も人間生活に離れにくくなったのであろうか。しかしこの人は、死んだ恋人が普通に自分の妻になつていて、こうした人を形見に残しておいてくれたならばと思ふのであつて、自身が名譽な結婚

をしたと見られている女二の宮から早く生まれる子があればよいなどとは夢にも考えないというのはあまりにも変わった人である。こんなふうにして死んで取り返しようなない人にばかり未練を持ち、新しい妻の内親王に愛情を持たないことなどはあまり書くのがお気の毒である。こんな変人を帝が特にお愛しになって、婿にまではあそばされるはずはないのである。公人としての才能が完全なものであったのであろうと見ておくよりしかたがない。

これほどの若い人をはばかり見せてくれた夫人の好意もうれしくて、平生以上にこまやかに話をしていっているうちに日が暮れたため、他で夜の刻をふかしてはならぬ境遇になったことも苦しく思い、薫は歎息を洩らしながら帰って行った。

「なんといいよいよにおいでしよう。『折りつれば袖こそにはほへ梅の花』というように、鶯もかぎつけて来るかもしれませぬね」
 などと騒いでいる女房もあつた。

夏になると御所から三条の宮は方角塞がりになるために、四月の朔日の、まだ春と夏の節分の来ない間に女二の宮を薰は自邸へお迎えすることにした。

その前日に帝は藤壺へおいでになつて、藤花の宴をあそばされた。南の庇の間の御簾を上げて御座の椅子が立てられてあつた。これは帝のお催しで宮が御主催になつたのではない。高級役人や殿上人の饗膳などは内蔵寮から供えられた。左大臣、按察使大納言、藤中納言、左兵衛督などがまいて、皇子がたで

は兵部卿ひょうぶぎょうの宮、常陸ひたちの宮などが侍された。南の庭の藤の花の下に殿上人の席ができてあつた。後涼殿の東に樂人たちが召されてあつて、日の暮れごろから双調を吹き出し、お座敷の上では姫宮のほうから御遊の樂器が出され、大臣を初めとして人々がそれを御前へ運んだ。六条院が自筆でおしたためになり、三条の尼宮へお与えになつた琴の譜二巻を五葉の枝につけて左大臣は持つて出、由来を御披露ひろうして奉つた。次々に十三絃げん、琵琶びわ、和琴わごんの名樂器が取り出された。朱雀院すざくから伝わつた物で薫の所有するものである。笛は柏木かしわぎの大納言が夢に出て伝える人を夕霧へ暗示した形見のもので、非常によい音ねの出るものであると六条院がお愛しになつたものを、右大将へ贈るのはこの美しい機会以外にない

思い、薫のためにこの人が用意してきたのであるらしい。大臣に
 和琴、兵部卿の宮に琵琶の役を仰せつけになった。笛の右大将は
 この日比類もなく妙音を吹き立てた。殿上役人の中にも唱歌の役
 にふさわしい人は呼び出され、おもしろい合奏の夜になった。御
 前へ女二の宮（によに みや）のほうから粉熟（ふすく）が奉られた。沈（じん）の木の折敷（おしき）が四つ、
 紫檀（したん）の高坏（たかつき）、藤色の村濃（むらご）の打敷（うちしき）には同じ花の折り枝（ぬい）が刺繡（ぬい）で
 出してあった。銀の陽器（ようき）、瑠璃（るり）の杯瓶子（さかずきいし）は紺瑠璃（こんるり）であつた。兵衛
 督が御前の給仕をした。お杯を奉る時に、大臣は自分がたびたび
 出るのはよろしくないし、その役にしかるべき宮がたもおいでに
 ならぬからと言ひ、右大将にこの晴れの役を譲つた。薫は遠慮を
 して辞退をしていたが、帝もその御希望がとおりになるようであ

つたから、お杯をささげて「おし」という声の出し方、身のとりなしなども、御前ではだれもする役であるが比べるものもないりっぱさに見えるのも、今日は婿君としての思いなしが添うからであるかもしれない。返しのお杯を賜わって、階下へ下り舞踏の礼をした姿などは輝くようであつた。皇子がた、大臣などがお杯を賜わるのさえきわめて光榮なことであるのに、これはまして御婿として御歡待あそばす御^{みこころ}心がおありになる場合であつたから、幸福そのもののような形に見えたが、階級は定まつたことであつたから、大臣、按察使^{あぜち}大納言^{しよ}の下の座に歸つて来て着いた時は心苦しくさえ見えた。按察使大納言は自分こそこの光榮に浴そうとした者ではないか、うらやましいことであると心で思っていた。昔

この宮の母君の女御によごに恋をしていて、その人が後宮にはいつてからも始終忘れぬ消息を送っていたのであつて、しまいにはまたお生みした姫宮を得たい心を起こすようになり、宮の御後見役代わりの御良人ごりょうじんになることを人づてにお望み申し上げたつもりであつたのが、その人はむだなことを知つて奏上もしなかつたのであつたから、按察使は残念に思い、右大將は天才に生まれて来ているとしても、現在の帝がこうした婿かしずきをあそばすべきでない、禁廷の中のお居間に近い殿舎で一臣下が新婚の夢を結び、果ては宴会とか何とか派手はでなことをあそばすなどは意を得ないなどとお譏そしり申し上げてはいたが、さすがに藤花の御宴に心が惹ひかれて参列して、心の中では腹をたてていた。燭を手にして

歌を文台の所へ置きに来る人は皆得意顔に見えたが、こんな場合の歌は型にはまった古くさいものが多いに違いないのであるから、わざわざ調べて書こうと筆者はしなかつた。上流の人とても佳作が成るわけではないが、しるしだけに一、二を聞いて書いておく。次のは右大將が庭へ下りて藤おの花を折ふじつて来た時に、帝へ申し上げた歌だそうである。

すべらぎのかざしに折ると藤の花及ばぬ枝に袖かけてけり

したり顔なのに少々反感が起こるではないか。

よろづ代をかけてにほはん花なれば今日けふをも飽かぬ色とこそ
見れ

これは御製である。まただれかの作、

君がため折れるかざしは紫の雲に劣らぬ花のけしきか

世の常の色とも見えず雲井まで立ちのぼりける藤波の花

あとののは腹をたてていた大納言の歌らしく思われる。どの歌にも筆者の聞きそこねがあつてまちがったところがあるかもしれない。だいたいこんなふうの歌で、感激させられるところの少ない

ものようであつた。

夜がふけるにしたがつて音楽は佳境にはいつていつた。薫が

「あなたふと」を歌つた声が限りもなくよかつた。按察使も昔はすぐれた声を持った人であつたから、今もりつぱに合わせて歌つた。左大臣の七男が童の姿で笙の笛を吹いたのが珍しくおもしろかつたので帝から御衣を賜わつた。大臣は階下で舞踏の礼をした。もう夜明け近くなつてから帝は常の御殿へお歸りになつた。纏頭てんとは高級官人と皇子がたへは帝から、殿上役人と楽人たちへは姫宮のほうから品々に等差をつけてお出しになつた。

その翌晩薫は姫宮を自邸へお迎えして行つたのであつた。儀式は派手なものであつた。女官たちはほとんど皆お送りに来た。庇ひさし

の御車に宮は召され、庇のない糸毛車いとげのくるまが三つ、黄金作りの檜こがね榔毛車ろうげのくるまが六つ、ただの檜榔毛車が二十、網代車あじろが二つお供をした。女房三十人、童女と下仕えが八人ずつ侍していたのであるが、また大将家からも儀装車十二に自邸の女房を載せて迎えに出した。お送りの高級役人、殿上人、六位の蔵人くろうどなどに皆華奢かしやな服装をさせておありになった。

こうしてお迎えた女二の宮を、薫は妻として心安く観察するようになったが、宮はお美しかった。小柄で上品に落ち着いて、どこという欠点もお持ちにならないのを知って、自分の宿命というものも悪くはないようであると喜んだとはいうものの、それで過去の悲しい恋の傷がいやされたのでは少しもなかった。今もど

んな時にも紛れる方もなく昔ばかりが恋しく思われる薫であつたから、自分としては生きているうちにそれに対する慰めは得られないに違いない、仏になつてはじめて、恨めしい因縁は何の報いであるということが判然することにより忘られることにもなろうと思ひ、寺の建築のことにばかり心が行くのであつた。

賀茂^{かも}の祭りなどがあつて、世間の騒がしいころも過ぎた二十幾日に薫はまた宇治へ行つた。建造中の御堂を見て、これからすべきことを命じてから、古山荘を訪ね^{たず}ずに行くのは心残りに思われ、そのほうへ車をやっている時、女車で、あまりたいそうなのではないが一つ、荒々しい東国男の腰に武器を携えた侍がおおぜい付き、下僕の数もおおぜいで、不安のなさそうな旅の一行が橋

を渡つて来るのが見えた。田舎風な連中であると思ながら下りて、大將は山莊の内にはいり、前驅の者などがまだ門の所で騒がしくしている時に見ると、宇治橋を来た一行もこの山莊をさして来るものらしかった。隨身たちががやがやというのを薰は制して、だれかとあとから来る一行を尋ねさせると、妙ななまり声で、「前常陸守様のお嬢様が初瀬のお寺へお詣りになつての歸りです。行く時もここへお泊まりになつたのです」

と答えたのを聞いて、薰はそれであつた、話に聞いた人であつたと思ひ出して、従者たちは見えない所へ隠すようにして入れ、「早くお車を入れなさい。もう一人ここへ客に来ている人はあります。心安い方で隠れたお座敷のほうにおられますから」

とあとの人々へ言させた。薫の供の人々も皆狩衣かりぎぬ姿などで目にたたぬようにはしているが、やはり貴族に使われている人と見えるのか、はばかって皆馬などを後ろへ退すきらせてかしまつていた。

車は入れて廊の西の端へ着けた。改造後の寢殿はまだできたばかりで御簾みすも皆は掛けてない。格子が皆おろしてある中の二間の襖からかみ子の穴から薫はのぞいていた。堅い上着が音をたてるのでそれは脱いで、直衣のうしと指貫さしぬきだけの姿になっていた。車の人はすぐにもおりて来ない、弁の尼の所へ人をやって、りっぱな客の来ていられる様子であるがどなたかというように聞こえてくるらしい。薫は車の主を問わせた時から山荘の人々に、自分が来

ているとは決して言うなと口どめをまずしておいたので皆心得ていて、

「早くお降りなさいまし。お客様はおいでになりますがお座敷においでになります」

と言わせた。

若い女房が一人車からおりて主人のために簾すだれを掲げていた。警固の物々しい騎士たちに比べてこの女房は物馴ものなれた都風をしていた。年の行った女房がもう一人降りて来て、

「お早く」

と言う。

「何だか晴れがましい気がして」

と言う声はほのかであつたが品よく聞こえた。

「またそれをおつしやいます。こちらはこの前もお座敷が皆しまつていたではございませんか。あすこに人が見ねばどこに見る人がございましょう」

と女房はわかつたふうなことを言う。恥ずかしそうにおりて来る人を見ると、その頭の形、全体のほっそりとした姿は薫に昔の人を思い出させるものであらうと思われた。扇をいっぱいにひろ拡げて隠していて顔の見られないために薫は胸騒ぎを覚えた。車の床は高く、降りる所は低いのであつたが、二人の女房はやすやすと出て来たにもかかわらず、苦しうに下をながめて長くかかつておりた人は家の中へいざり入った。紅紫のうちぎ桂なでしこに撫子色らしい細

長を着、うすみどり淡緑の小桂を着ていた。向こうの室は薫ののぞく襖か
らかみ子の向こうに四尺の几帳きちようは立てられてあるが、それよりも穴
のほうが高い所にあるためすべてがこちらから見えるのである。
この隣室をまだ令嬢は気がかりに思うふうで、あちら向きになつ
て身を横たえていた。

「ほんとうにお気の毒でございました。泉河いづみがわの渡しも今日は
恐ろしゆうございましたね。二月の時には水が少なかつたせいか
よろしかつたのでございます」

「なあに、あなた、東国の道中を思えばこわい所などこの辺には
あるものですか」

実際女房は二人とも苦しい気もなくこんなことを言い合つてい

るが、主人は何も言わずにひれ伏していた。袖から見える腕かいなの美しさなども常陸ひたちさんなどと言われる者の家族とは見えきしよず貴女らしい。薫は腰の痛くなるまで立ちすくんでいるのだったが、人のいるとは知らずまいとしてなおじつと動かずに見ていると、若いほうの女房が、

「まあよいにおいがしますこと、尼さんがたいていらつしやるのでしようか」

と驚いてみせた。老いたほうのも、

「ほんとうにいい香ね。京の人は何といつても風流なものですね。ここほどけつこうな所はないと御主人様は思おぼしめ召すふうでしたが、東国ではこんな薫くんこう香を合わせてお作りになることはできません

でしたね。尼さんはこうした簡単な暮らしをしていらつしやつてもよいものを着ていらつしやいますわね、鈍色にびだつて青色だつて特別によく染まった物を使つていらつしやるではありませんか」

と言つてほめていた。向こうのほうの縁側から童女が来て、

「お湯でも召し上がりませうように」

と言ひ、折敷おしきに載せた物をいろいろ運び入れた。菓子を近くへ持つて来て、

「ちよつと申し上げます。こんな物を召し上がりません」

と令嬢を起こしているが、その人は聞き入れない。それで二人だけで栗くりなどをほろほろと音をさせて食べ始めたのも、薫には見馴なれぬことであつたから眉まゆがひそめられ、しばらく襖子の所を退の

いて見たものの、心を惹くものがあつてもとの所へ来て隣の隙見すきみを続けた。こうした階級より上の若い女を、中ちゆうぐう宮の御殿をはじめとしてそこで顔の美しいもの、上品なものを多く知つてゐるはずの薫には、格別すぐれた人でなければ目にも心にもとどまらないために、人からあまりに美の観照点が違い過ぎるとまで非難されるほどであつて、今日の前にいるのは何のすぐれたところもある人と見えないのであるが、おさえがたい好奇心のわき上がるのも不思議であつた。尼君は薫のほうへも挨拶あいさつを取り次がせてよこしたのであるが、御気分が悪いとお言いになつて、しばらく休息をしておいでになると、従者がしかるべく断わつていたので、この姫君を得たいように言つておいでになつたのであるか

ら、こうした機会に交際を始めようとして、夜を待つために一室にこもっているのであると解釈して、こうしてその人が隣室をのぞいているとも知らず、いつもの薫の領地の支配者らが機嫌伺いに来て重詰めや料理を届けたのを、東国の一行の従者などにも出すことにし、いろいろと上^{じょうず}手に計らっておいてから、姿を改めて隣室へ現われて来た。先刻ほめられていたとおりに身ぎれいにしていて、顔も気品があつてよかつた。

「昨日お着きになるかとお待ちしていたのですが、どうなすつて今日もこんなにお着きがおそくなつたのでしよう」

こんなことを弁の尼が言くと、老いたほうの女が、

「お苦しい御様子ばかりが見えますものですから、昨日は泉河の

そばで泊まることにしまして、今朝も御無理なように見えましたから、そこをゆるりと立つことにしたものですから」

姫君を呼び起こしたために、その時やつとその人は起きてすわった。尼君に恥じて身体からだをそばめている側面の顔が薫の所からよく見える。上品な眸めつき、髪かみのぐあいが大姫君の顔も細かによくは見なかつた薫であつたが、これを見るにつけてただこのとおりであつたと思ひ出され、例のように涙がこぼれた。弁の尼が何か言うことに返辞をする声はほのかではあるが中の君にもまたよく似ていた。心の惹ひかれる人である、こんな姉たちに似た人の存在を今まで自分は知らずにいたとは迂闊うかつなことであつた。これよりも低い身分の人であつても恋しい面影をこんなにまで備えた人

であれば自分は愛を感じずにはおられない気がするのに、ましてこれは認められなかつたというだけで八の宮の御娘ではないかと思つてみると、限りもなくなつかさうれしさがわいてきた。今すぐにも隣室へはいつて行き、「あなたは生きていたではありませんか」と言い、自身の心を慰めたい、蓬菜ほうらいへ使いをやつただ証しるかんざしの簪かんざしだけ得た帝は飽き足らなかつたであろう、これは同じ人ではないが、自分の悲しみでうつろになつた心をいくぶん補わせることにはなるであろうと薫が思つたというのは宿縁があつたものであろう。

尼君はしばらく話していただいであちらへ行つてしまった。女房らの不思議がついていたかおりを自身も嗅かいで、薫ののぞいてい

ることを悟ったためによけいなことは何も言わなかったものらしい。

日も暮れていったので、薫も静かに座へもどり、上着を被^きたりなどして、いつも尼君と話す襖^{からかみ}子の口へその人を呼んで姫君のことなどを聞いた。

「都合よく私がここで落ち合うことになったのですが、どうでした私が前に頼んでおいた話は」

と薫が言うとうと、

「仰せを承りましたからには、よい機会があればとばかり待っていたのでございますが、そのうち年も暮れまして、今年になりましたから二月に初瀬^{はせ}参りの時にはじめてお逢いすることになったの

でございます。お母さんにあなた様の思召しをほのめかしてみますと、大姫君とはあまりに懸隔のあるお身代わりでおそれおいと申しておりますが、ちようどそのころはあなた様のほうにもお取り込みのございましたころで、お暇ひまもないと承っております。たし、こうした問題はことにまたお避けになる必要があると存じましてその御報告をいたしますことも控えておりました。ところがまたこの月にもお詣りまいをなさいまして、今日もお帰りがけにお寄りになったのでございます。往復に必ずおいでになりますものお亡なくなりになりました宮様をお慕いになるお心からでございます。しよう。お母さんがさしつかえがあつて今度はお一人でお越しになつたものですから、あなた様が御同宿あそばすなどは申され

ないのでございます」

こう弁の尼は答えた。

「見苦しい出歩きを人に知らすまいと思つて、客は私だと言うなと言つておきました、どこまで命令は守られることかあてにはならない。供の者などは口が軽いものですからね。だからいいではありませんか、一人で来ていられるのはかえつて気安く思われますからね、こんなに深い因縁があつて同じ所へ来合わせたと伝えてください」

と薫が言つと、

「にわかな御因縁話でございますね」と言い、

「それではそう申しませう」

立つて行こうとする弁に、

かほ鳥の声も聞きしにかよふやと繁^{しげ}みを分けてけふぞたづぬ
る

口ずさみのようにして薫はこの歌を告げたのを、姫君の所へ行
つて弁は話した。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

※「あきはつる野べのけしきもしの薄《すすき》ほのめく風につけてこそ知れ」の歌の前には、底本ではカギ括弧が二つありましたが、一つにしました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

宿り木

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>